

シベリア連行兵士のカラガンダ炭鉱強制労働の証言
[並びに参考資料]

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2016-12-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 義彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009922

論 説

シベリア連行兵士のカラガンダ炭鉱強制労働の証言 [並びに参考資料]

山 本 義 彦

【前書き】

以下は、シベリア抑留体験者である大井篤郎氏（1920年生れ、静岡県牧之原市在住）の証言を中心として、発刊されている種々の記録と突合せて構成した資料である。



大井篤郎氏と妻であるさん

2015年10月の政治経済学・経済史学会福島大学大会で、旧ロシア金融史研究者の伊藤昌太福島大学名誉教授から、シベリア強制労働に従事された叔父大井篤郎氏のシベリア抑留体験に関する紹介を受け、ヒアリングすることとした。



勃利の第4連隊時代
1944年9月

筆者は、これまで戦時下の被害と加害の国民的問題を実地調査や資料調査によって行ってきた。1980年代初めから今日まで、一つには、戦争に動員された人々が、いつ、軍隊のどの階級、どの地域、海域で、年齢別、独身か、妻帯者か、戦死か戦病死か、などの状況を、各地の地域調査によって掘り起こし、検証してきた。また2013～14年には、動員された兵士たちから故郷に到達した軍事郵便の内容調査であった。その地域としては、静岡県袋井市、焼津市、旧菊川町、森町、旧福田町、旧中川根町などであり⁽¹⁾、これらについては、各市町史ですでに取り上げてきた。また静岡県史近現代編通史及び資料編にも扱った。従軍慰安婦問題では韓国、フィリピン、インドネシア、シンガポールなどの被害者等からの証言、第二に1995～2000年代初頭、中国東北の戦争被害、中南部の南京、寧波、麗水、義烏などでの731部隊被害状況のヒアリング調査。第三に1997年以降の韓国入女子勤労挺身隊国家賠償請求訴訟への関与、第四に1995年前後から2014年、これらに重ねて満蒙開拓団に動員された人々の現地での実相と敗戦期の混乱、その動員された事情、第五に2015、16年⁽²⁾、旧制高等学校出身者（静岡高等学校）の学徒出陣等での苦悩とそれを示す便りの再点検⁽³⁾、

⁽¹⁾ 私の取り組みとしては、袋井市教育委員会『袋井市史』通史編、1983年が最初である。

⁽²⁾ 磐田市教育委員会『福田町史』通史編、2016年3月。

⁽³⁾ 旧制静岡戦没者遺稿集編集委員会編集『地のさざめごと』：旧制静岡高等学校戦没者遺稿集、1966年11月。

第六に、これらの戦後補償問題での協力や証言を通じた市民公聴会での市民向け啓発取り組みである。

今回は新たな取り組みの意味を持つシベリア抑留問題での体験者ヒアリングという点で、きわめて興味深く感じさせられるところである。それゆえ、まだまだ調査すべきこれまでの先行研究を十分には前提にしていないので、きわめて不十分なレポートであり、思わない誤りも多々あることを恐れている。それらの過誤はすべて筆者の責にあることは言うまでもない。

【ヒアリング報告及び諸資料との突合せ】

【1】出生から兵役前まで

1920年6月2日 台南市生まれ 大井金平（1879年生まれ）・いつの長男。

父 静岡師範（静岡市、現静岡大学教育学部）を終えて、一年で新設の静岡県榛原郡細江小学校長となったが、仙台の臨時教員養成所（当時は県立師範学校と共に存在した）に進学し、数学教員資格を得た。それにより、各地に転勤を行うことになる。数学を担当する台南師範学校教師、台北師範学校教師、その後千葉女子師範（現・千葉大学教育学部）に転任を繰り返した。実家は江戸時代からの商家。



勃利の第4連隊時代
1944年9月

1915年9月3日 台湾総督府勤務を命ぜられる。

1925年3月31日 46歳で日本に戻る。

1960年4月14日 81歳で死去。

母 1922年6月、篤郎氏1歳のときに盲腸で死去、このために、篤郎氏は、榛原郡相良町静波の祖父祖母の下に送り返されて、育てられる。4人の姉たちがいた。それは父が1922年 篤郎氏を2歳のとき、1ヶ月の船旅で日本に連れ戻したことであった。

1927年4月 7歳、川崎小学校に入学。

1933年4月 静岡県立榛原中学（現・静岡県立島田高等学校）入学。

1938年4月 静岡師範学校第二部に入学（現・静岡大学教育学部）、旧制中等学校を経ると師範学校は2年生の第二部に入学することになる、同校は静岡市に存在。

1940年3月 同校、卒業。当時師範学校を卒業した生徒のうち3分の1程度は教師にならず、家業、農家（5分の1程度）をつぐ時代であった。体格があれば陸軍士官学校に行くのが当時の状況、それが無理で勉学好きならば、師範学校などにいった。

1940年4月 大洲小学校（現藤枝市立大洲小学校）教員、3年生を2年間受け持つ。

1942年4月 掛川第二国民学校（掛川市立第二小学校）に転勤（磐田農学校校長〔現・静岡県

立磐田農業高等学校] であった鈴木金作 [姉まさ子の夫] 宅を下宿先とする)。

[2] 召集

1944年5月12日 赤紙で第二補充兵召集を受ける。柔道は強かったものの、体重が46kgで、正規兵士としては不足しており、このため補充兵となった。足が短いので騎兵や輜重兵には向かなかった。衛生兵では恥ずかしく、歩兵になれたのは当時として名誉なことだった。

5月15日 静岡中部第三部隊歩兵第三十四連隊第三中隊機動歩兵(戦車)第二師団に所属した。

5月19日 深夜十二時に駿府城から1,000人ほどの見送りを受けて列車に乗り込み、博多港に着く、駆逐艦の護衛を受けて貨物船に乗船し、朝鮮プサン港に到着、東海岸の陸路を北上し、満州勃利機動歩兵第二連隊第三中隊に転属(1943年8月動員者全員)。

静岡での出征見送りは何百人から千人という状況で、拍手や「お元気で」と言う声、わが子の名前を呼ぶ人あり、我が家の両親も見送ってくれたとのことだが、わからなかった。

1944年8月 大井氏たち補充兵は他の部隊と合流、ほとんどはフィリピンに移動、大井氏たちは残留、編み笠が支給されて実弾演習も行われた。

1944年8月末 戦車第三十四連隊に転属した。

1945年3月 石頭独立歩兵第580大隊第2中隊に転属。石頭は今日では吉林省扶余駅(1904年開業当時は石頭城子駅、その後、三岔河駅)

1945年4月 安東独立歩兵第580大隊に移動。

[3] 満州での軍役



勃利神社参拝後、1等兵
1945年1月8日

1945年7月20日 部隊長は大尉(4個中隊・機関銃中隊・輜重兵中隊で構成)。大井氏は二つ星の1等兵であった。

奉天省新民県(現在の遼寧省新民市、瀋陽市の西北部)の第7遊撃隊(2,000人)に転属。大井氏(1等兵)は2等兵2名を連れてゆくが、止まるべき新民の駅に止まらず行き過ぎた。そしてダコ山の山道を行き、翌日貨車で引き換えし目的地の8中隊に向かう。そこで乗馬訓練を受ける、しかしそれはごく簡単なものだったがそれでは実戦にむかないはず。

1945年8月15日 暖炉を取りに荷車で出かけたが、前から来た荷車から戦争が敗北と聞く(広島、長崎原爆が原因らしいとも)。当時は新民の遊撃隊に所属、現地の将校級では、敗北と認識されていた。本人としては小学校以来叩き込まれた教育で、敗北にショックを感じた。この時期、戦後に妻となるてるさんによると、榛原郡相良高女生徒として富士紡績[静岡県駿東郡]小山工

場に学徒勤労働員中で、8月15日正午、玉音放送で直ちに敗北を知ったとはいえない。陸軍士官学校を出た人たちは、敗戦を予想していたようだけれどもとのことである。

大石氏は新民に戻るとき、部隊では戦時中の秘密書類を焼却していたが、戻ってみると朝鮮旗（大韓帝国旗の太極旗）ばかりが目付いた。

ハイラル（現在の中華人民共和国 内モンゴル自治区海拉爾）からの列車に乗ってきた人々が到着、満服に着替えて逃亡することで、「ちゃっかりと」抑留に引っかからない人もいた。

[4] 召集解除

終戦で、奉天（現・瀋陽市）北大營に到着して食事、在満召集兵は銃を持たず、召集解除された大井氏は分隊長から炊事部に行くよう指示を受け、1,000メートルほどの所に歩いてゆく。在満召集兵が故郷に返され、その補充に大井氏が行くことになった。

表-1 カラガンダの捕虜と抑留者

分所	所在地	捕虜		抑留者	合計
		欧州系	日本人		
1	スパースク	1,780	1,335		3,115
2	フォードロフカ村	1,498	-		1,498
3	コステンコ記念炭鉱	1,020	-		1,020
4	キーロフ記念炭鉱	1,181	1		1,182
5	第31番炭鉱	1,298	43		1,341
6	第42/43番炭鉱	33	2,351		2,384
7	西部炭鉱	1,898	-		1,898
8	第26番炭鉱	39	1,367		1,406
9	第20番炭鉱	2	1,525		1,527
10	西部	7	1,134		1,141
11	第2レンガ工場	10	801		811
12	ドゥボフカ村	1,213	-		1,213
13	サラン製造	61	-		61
14	採石場	8	449		457
15	「住宅建設」修理場	1,460	-		1,460
16	西部	2	320		322
17	テルミタウ市	813			813
18	テルミタウ市	7	1,103		1,110
19	テルミタウ市		810		810
22	コクゼク村	-	-	184	184
	合計	12,230	11,739	184	24,253

出典：Iaponskie voennoplennye v Karagandinskoi oblasti, pp.414-415
 富田 武「回想記に見るカラガンダの日本人捕虜」成蹊大学『アジア太平洋研究』2014年特別号, 34頁

炊事部だから「これからは食べられるぞ」と思ったところ、日本兵がくるはずと判断していたが、パンパンと音がした。銃撃戦となったのである。

[5] ソ連軍との交戦

大井氏によると、余談ということだが、大井氏の留守中に日本側は百名余りの兵隊であり、終戦後にもかかわらずロシア兵は戦車部隊が進駐して大砲を打ち込み戦闘を挑んできた。わが分隊では兵長が戦死し菊間上等兵は負傷、大井氏は命拾いをした。同氏が、後に聞いた話ということであるが、内地の我が家では太七おじいさんがきしおばあさんと一緒に、朝晩、大井氏の無事を祈ってくれていたことを知り、涙が止まらなかった

という。食料廠には砂糖があり、砂糖に味噌を加えてみたがうまいものではなかった。慰問袋には女優高峰秀子の写真が入っていたが、これは盗まれた。写真はタバコの箱に隠し持っていたが、パッと振り返ったら携行物が盗まれるという感じだった。ソ連兵が銃剣を差し込む太い革帯をほしがったので与えた。その代わりに細い革ベルトを交換してもらった。

しかしその細い革ベルトを、その後、他の日本人兵士に盗まれ、京都の軍曹に頼んで取りもどした。このような時期には日本兵の間でも綱紀が乱れていたわけだ。中隊が着の身着のままできてきた。第八中隊をソ連が武装解除。しかし銃撃戦がその後も続くなどして再び武装解除といった感じである。当時の軍隊ではたいていの人々がタバコを喫煙したものだが、大井氏は余り好みではなかった。そこで手持ちのタバコと日用品の交換をしたこともあった。タバコ好きの中には、野草を焼いて吸う人も出たが、この場合は、夜に眠れないなどの弊害も見られた⁽⁴⁾。大井氏は、ソ連の戦車を見たとき、日本の薄い鉄板による戦車ではひとたまりもないと実感したという。この感想は作家司馬遼太郎がノモンハン事件で実感したものと同じだろう。司馬はここから昭和の軍部がいかに人命軽視であったかを回想している。周知のように司馬はこれとの対照で明治の政治、軍事の合理性を高く評価した⁽⁵⁾。しかしその後の研究で、司馬はその誤り、つまりまさに彼が高く評価した日清日露戦争期までの日本のあり方が昭和期の軍部指導をもたらしたと逆転評価したのである。この評価の正当性は、日本最初のアメリカのエール大学教授となった福島二本松出身の朝河貫一は⁽⁶⁾見事に描いている。朝河は本書で明確に日露戦争の「辛勝」こそが、日本のその後の帝国主義のあり方を形作ったとしている⁽⁷⁾。

日本軍兵士の腕時計をソ連兵が武装解除と同時に奪ったり、盗んだりもした。また背嚢を満人(当時現地の人々をこのように表現するが、実ほどの民族かは不明)が盗んだ。このことを坂根曹長に言うと、日本の金で300円をくれた⁽⁸⁾。日本円はここでは使用できないが、大井氏は第八中隊炊事兵の身分で武装解除された。勃利には李紅蘭の羊の育成場があった。他方で、大井氏は、日本兵によって盗まれる経験もしたので、戦争とはそういうものだと感じさせられたという。なおアングレン炭坑の体験者は「労働の報酬としてルーブル札を貰う捕虜もいたが、これは技術者かハラショーラボーター〔優秀労働者хорошо работа〕であり、私のような働きの悪い土方には支

⁽⁴⁾ 「ニコチン中毒のようなタバコ好きの者は、タバコがなくなると、外でヨモギの葉などを摘んでタバコの代用にした」(斎藤邦雄 [高崎東部第38部隊第1機関銃中隊、イルクーツク地区ラーゲルを転々]『シベリア抑留兵よもやま物語』光人社、152頁、1988年、ただし委員用は2006年同NF文庫版)

⁽⁵⁾ 司馬遼太郎『坂の上の雲』全6巻、文芸春秋、1969～72年。

⁽⁶⁾ 朝河貫一『日本之禍機』実業之日本社1909年。(原版：<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/785643>)

⁽⁷⁾ 筆者は、むしろ日清戦争による賠償金を獲得した日本が金本位制と軍備拡張にこれを活用した時期までさかのぼって評価すべきだと判断している(拙著『戦間期日本資本主義の経済政策』柏書房、1989年、『近代日本資本主義史研究』ミネルヴァ書房、2002年ほか)。

⁽⁸⁾ 1940年の勤労者給与年取125円＝矢野恒太記念会、『日本の100年』による。

給されることもなく、金をつくるには手持ちの私物を処分するより方法はない⁽⁹⁾と述べている。

[6] 捕虜収容所行き

捕虜収容所では歩哨はモンゴル兵、指揮官は白人（スラブ系の意味か？）であった。

1,000人単位でソ満国境の黒河（アムール川沿岸）まで送られ、ここで1人死に、その後、半月間1万人が滞在、アムール川を越えてソ連領のブラゴヴェシチェンスク（Благовещенск）で1ヶ月、テント生活の後に帰国するとのことを知り、やはり日本の敗北を実感した。皆、ここでは「ダモイ、ダモイ」（домой, домой）と、母国日本にいよいよ帰られるぞと喜び合った。それもつかの間、その後、貨車にのせられ、西へ西へとついにバイカル湖に到着。悲嘆にくれてしまった⁽¹⁰⁾。大



図-1 カラガンダの位置

井氏の回想には見られないが、ハバロフスクから収容所までの行路で、シベリア鉄道で北に向かうが、「一車両二五名くらいで雑穀を積んだ貨車も含めて四十数両の編成で、一千名」の部隊が連行され、「高粱・大豆・粟・包米^{ポミー} [とうもろこしの粉] などの雑穀で、副食はなにもない」という⁽¹¹⁾。

[7] カザフスタンのカラガンダ鉱山

1945年12月〔11月〕99地区9分所であるカザフスタン共和国Казахстан Республикасыのカラガンダ炭鉱Комбинат Карагандашахт острой（カラガンダ鉱山コンビナート）に送られた。カラガンダとはカザフ語で石炭が取れることから「黒い街⁽¹²⁾」という説や「黄色いアカシアの生育地⁽¹³⁾」という説もあるという。それぞれに、証言者の証言で理由があるという風に見られている。二段ベッドで、毛布をかけて寝たが、床は板であった。建物は木造で、外装は土壁にしてあった。建物に入るには階段を利用していた（表-1、図-1）。

なおカラガンダの99地区8分所については、川堀耕平氏の回想記に見られる⁽¹⁴⁾。川堀氏は、ア

⁽⁹⁾ 池田幸一〔富嶽第37324部隊〕『同人誌『新樹』 顛末』『捕虜体験記』V, 278~279頁

⁽¹⁰⁾ これとまったく同様の体験談は多くみられる。時に「満州では船を出せないで、ソ連領に入ってから日本向けの船が出る」などと伝えられている。

⁽¹¹⁾ 酒井為安〔満州第383混成部隊〕『シベリア抑留生活記』『捕虜体験記』V, 246頁) 味方俊介「写真で見る日本人抑留者の足跡」成蹊大学『アジア太平洋研究』特別号, 2014年, 27頁。

⁽¹²⁾ 鉱物資源の故か、善木武雄〔満州住友金属工業株式会社〕『私の抑留記』『捕虜体験記』V中央アジア, 57頁

⁽¹³⁾ 江口十四一〔関東軍石頭予備士官学校〕『カラガンダについて』『捕虜体験記』V中央アジア, 4頁。

⁽¹⁴⁾ 『カラガンダ第八分所—中央アジア抑留記』渌水社, 2008年, また同氏『カラガンダ第八分所の美術展—横山操・幻の絵』ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会『捕虜体験記』V, 1986年がある。

クティブとなって、絵画を描くなどで活躍し、帰国後は医師となった。

見渡す限りの高原地帯。到着するとすぐに元ドイツ兵捕虜の住んでいた宿舎をあてがわれる。ナチズム支配下のドイツ兵士がロシアで戦って捕虜とされていたことから、大井氏は、自分たちも「捕虜」として扱われるのは屈辱と感じていた。それは「恥を知る者は強し。常に郷党家門の面目を思ひ、愈々奮励して其の期待に答ふべし。生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」との戦陣訓⁶⁹⁾の教育が大きかったと回想する。この地ではノモンハン事件の歩兵中尉だった人にも会ったが、「いまさら故国に帰れぬ」と述べていたと、後に出てくる比留間次郎軍曹から聞かされた。同様の証言を上げておこう。タシケントに抑留された川口浩氏は「タシケントの労働」で、「自分はおそらく行方不明者として、あるいは靖国神社にまつられているかもしれないが、当時の日本軍捕虜で同様な立場にあった者が相当数いて、みずからシベリア残留を希望し、ロシア人を妻として一生シベリアに永住のやむなき立場に置かれている。君たちは天皇の命による終戦の結果の軍事俘虜なので立場が違う、みなさんは大いばりで帰国できるようになったら帰ってください」と、眼に涙を浮かべながら寂しく泣き、笑った人との会話は、同じ日本人でありながら、立場が違うとかくも身分が異なるのかと、大きなショックを受け、また彼ら異国の日本人の幸福を祈ったものであると、のべている⁷⁰⁾。

到着直後には大井氏を含む4人が使役に出され、病院に行く。身体検査を前に、裸体のドイツ人死者を担架にのせて、墓穴に投げ込んで、石ころをかぶせた。自分たちもこうなるのかと思った。まともな墓地ではない。これだけでぞっとさせられた。この兵士たちも若いころには楽しいことも多々あっただろうに、と思ひめぐらせて合掌して涙をぬぐったものである。この地は、末尾の資料に提示したように、年間平均気温を見ても冬場の気温を見ても極寒の地とまではいえませんが、それでも冬は寒く、夏は日本から見ても恐ろしく暑い地域であったという点で抑留者には酷な地帯であったことには変わりないだろう。死体の埋葬はこれに限らず各地で日本人の埋葬も余儀なくされている。次のような証言も注目しておこう。「仕事は主に伐採や収容所の整備だったが、なかに墓穴掘り小隊という名の一団があった。毎日のように栄養失調や凍死で倒れる兵隊は、とりあえず倉庫の中に並べられ、この人たちの手で順次土葬された。しかし、約五〇名の人員で穴を掘りつづけるのだが、凍土は四〇センチくらいまでは鉄のように固く、鍛冶工がツルハシの先端をとがらしていても、一日でまるくなってしまうという状態だったので、仕事はなかなか捗らず、死体は増えるばかりだった」⁷¹⁾。ドイツ兵士は、ソ連側の共産主義教育に対して、毅然とし

⁶⁹⁾ 1941年1月8日東條陸軍大臣訓令第1号「本訓其の二第八名を惜しむ」。

⁷⁰⁾ 川口浩は「タシケントの労働」『捕虜体験記』V、288頁。こうした証言に当たるものに武田正直（関東軍機動第一旅団第三連隊）『酷寒シベリア抑留記—黒パン三五〇グラムの青春』光人社、2001年、230頁にも記録されている。

⁷¹⁾ 築山衛 [関東軍石頭予備士官学校]「入ソ当時のこと」『捕虜体験記IV』ハバロフスク地方篇、1985年、158頁。

ていて、日本軍兵士はその点で動揺的だったとする証言がいくつも見られる。おそらくそれは日本軍の戦争目的についての合理性の説明欠如、兵士教育、何よりも戦争動機の理解が出来ない状況があったために信念の維持の不足に対して、ドイツの場合はナチズム国家それ自体が国民的支持を背景に形成されていたことと無縁ではないだろう。政治工作に対する日本人将校の抵抗感が根強く「一九四六年後半まではどんな特別な成果も見られなかった... 捕虜の初めの半年間、大多数の収容所では捕虜はひとつも演説を聴かなかつたし、『日本新聞』を読んでさえもいなかった」⁹⁸という。むしろその年の前半までは、「日本の軍幹部が、『日本新聞』に関心を示した兵士や、許可なしにソヴィエト司令部の手伝いをした兵士に警告を発した」⁹⁹とも記録されている。要するにソ連側の姿勢もあって、捕虜の管理上、日本軍の階級制を利用した支配が行われていたことから、こうした事実が生まれたと思われる。当然、日本の軍人たちの多くは、「侵略」も認めることはなく、「敗戦」の事実を認めず、「天皇のご命令で戦闘を停止した」とか武器の放棄も、天皇の命令によるものと認識し続けていたのが実態であり、これにはソ連側関係者が驚いたという¹⁰⁰。こうした国際関係論的発想の欠如はまさに当時の戦争思想動員の結末でもあったろう。

【8】鉱山での労働

2カ月に一度の定期検査の日、身体検査は皆、全裸にされ、ソ連軍女医に、通訳立ち合いで体の前後を見られ、臀部を二本の指でつまみひっぱって弾力を確かめて、1～4級に区分。1～2級は炭鉱労働行き。3～4級¹⁰¹は地上作業とそれぞれ告げられた。この評価方法に対して、タシケント方面のレンゲル収容所では、毎月の検査で一級、二級、準二級、三級、保護者、栄養失調の6階級に分けられたという。しかも一級はもっとも健康状態のよい者（重労働に耐えるもの）、二級は一級よりやや劣ると見られる者（以上は炭鉱内作業）、準二級は二級でもやや丈夫でない者、あるいは既往症のある者など（炭鉱の付随作業）、三級は炭鉱作業に耐えられない病弱者（建築作業や農場作業など）、オー・カー・OKは保護を要するものとされた者は全裸でこのような判定をされ¹⁰²、結果に服する屈辱は抑留者として悲哀をつくづく感じたものである。カラガンダでの体験談は、大井氏以外でもみられるが、やはりこれとまったく同様の内容であることから、大井氏の記憶力の高さとそれだけに酷な環境を想像させる。しかし他方で、ご本人は意外にも明るく回想しており、楽天主義的な立ち居振る舞いを感じさせられる。ここでは満召集兵の班長がリー

⁹⁸ 『スターリンの捕虜たち』124頁

⁹⁹ 同書、126頁。

¹⁰⁰ 同書、121頁他。

¹⁰¹ 4級は「オーカー」と呼ばれる「無能力者」、川堀耕平『カラガンダ第八分所』、61頁。

¹⁰² 山崎三郎 [満州第336部隊]「散々録」『捕虜体験記』V、中央アジア篇、217頁。各級にノルマがあり、一級は100%、二級は80%、三級は軽作業で60%という報告がある（小川護『私のシベリヤ物語』光人社NF文庫、2011年、109-110頁）。

ダーを務めていた。長野の佐伯さん、宮崎の姫野さんなどと親しく付き合ったので、寂しい思いはなかった。念のために言えば、第一は重労働適合者、第二は軽労働適合者、第三は室内の軽作業適合者、そして第四に当たる要保養の病弱者（オー・カー）である。この病気体験者の記録に次のようなものがある。「ラザレート〔病院〕の食事は、吹雪を突いて酷寒のなかでの建設労働に、コルホーズに、また炭鉱労働で働く兵隊たちより恵まれていた。朝、昼、夕の三食のほかにも間食としてピロシキヤプリンなどの特別メニューがあった。／スパースク病院は、軍事捕虜の先輩であるドイツ人軍医将校から衛生看護兵、毎日の食事づくり、コックなどにわたるすべての運営権は、彼らゲルマン（ドイツ人）の手にあった。／回診や治療もドイツ軍医将校や看護兵によって実施されていた。したがって病院の患者食もドイツ式料理が大半で、ときおりロシア料理になったりすることもあった」⁸³。治療も毎日、回診は週に2、3回という。病院に関しては当時のソ連事情から見ても、比較的待遇がよかったといえるかもしれない。藤部隊は第三十九師団で、中支から満州に転進している。身体検査では次のような証言もある。「元浦隊長から『全員、ソ連の医師によるカテゴリー検査を実施する』と通達された。いわゆる身体検査である。ソ連の医師の前で丸裸になると、医者はまず玩具のような聴診器で胸部を診察する。それから回れ右、『お尻を出しなさい』と言って、臀部のふくらんだところをつねるようにしてさわる。その結果、アジン、ドワー、トゥリー、オ・カと、各人の等級が言い渡される。アジンは一級労働、ドワーは二級労働に適し、トゥリーは三級労働で、主に浴場、縫工、清掃など収容所内の軽作業、オ・カは栄養失調のため労働に適せず、もっぱら休養を旨とすべし、ということだった。（改行）臀部の検査は面白かった。つねってみて皮下脂肪がたっぷりついていれば一級、それより少し落ちても二級にランクされ、骨からすぐ皮という状態であれば三級、それ以下の虚弱者はオ・カというランクになる。入ソ第一回目のこのカテゴリー検査で、私は幸か不幸かオ・カだった」⁸⁴。

大井氏は第2級で炭鉱労働とされた。第8炭鉱に入った。リスターク⁸⁵といって電動式の丈夫な鉄板の箱に石炭を入れる。箱にシャベルで石炭を休む暇もなく入れ、次から次へとリスタークは回ってきて、手の負傷などを含め、体調を崩し、3級となり5里ひよろひよろと歩いてコルホーズで農業労働（夏）に従事。草刈りとか馬鈴薯掘りとやらされ一冬を過ごし、春にはまた炭鉱に戻る。それぞれランプを渡され、穴に入る。後に携帯電機を使って三年間労働する。1949年になっても帰国できないため、全てに失望し一旦、ソ連に住みつ়決意をする。野良仕事では仲間たちでその女性たちの尻を追いかけたくなることもあった。ちょうど女医にされたように、発熱などをきっかけに地上勤務（3級）を命ぜられて春に向かったのがコルホーズであった。ロン

⁸³ 「スパースク病院・第22収容所」泉雅行〔藤第六八六部隊〕『捕虜体験記』V中央アジア篇，73頁。

⁸⁴ 築山衛〔関東軍石頭予備士官学校〕「入ソ当時のこと」『捕虜体験記IV』ハバロフスク地方篇，157～158頁

⁸⁵ 石炭を貨車に積み込む機械で、掘り出された石炭を、上部から流して下部の位置にある貨車に積み込む仕掛け。

ア兵に対して水汲みや炊事を行ったが、地上勤務は比較的になな労働だった。コルホーズの労働では夜中に牛や豚の糞尿を水で流して田んぼの肥料にする労働もあり、明け方3時ころには明るくなるので、きつuitと感じた。収容所からコルホーズに出かける時には拘束はなかったが、その他では収容所から出られなかった。実際に、カラガンダで収容所を脱出しようとして警備兵に銃弾を撃たれ死んだ人もいることが証言録にも記録されている。

冬は炭鉱労働で8時間が基本で、午前8時～午後4時、午後4時～12時、夜9時にはたたき起こされ午前12時～午前8時の3交代で、まず一か月交代であったが、多くの人が体を壊したために、上司（日本軍の上官）に変更を求め半月交代に変更。たいていの人々は夜勤で体調を壊してしまうきつuit労働だった。この労働時間制の記憶も多くの回想記にも見られる。日本軍の上官に従うことには抵抗感や反発はなかったのか？特にそのような事実はなかった。というのは大井氏の部隊（グループ）は団結力が強く、結束していたので、上官が横暴な態度をしたとは思えないからという。

もつとも、カラガンダの他の人たちの証言を見ると、ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会『捕虜体験記V中央アジア篇』1992年の冒頭には「カラガンダ地区」から11篇の記録が寄せられ、また同『VIII民主運動篇』では3篇が寄せられていて、「民主運動」は結構活発であったと思われるので、大井氏の戦前米の反共主義の強靱な意識がそれだけに強いものがあつたといえるだろう。とはいえヒアリングの限りで、ご本人の当時の愛国主義が強烈であつたかというところれほどにも思われぬい。

上官による兵への嫌がらせ、しごき、私刑は抑留地でも引き続き行われ、下部の怨嗟的だつたことを指摘する柴山光男氏の証言⁶⁰も見られるので、実態は、それぞれの上官のあり方によるのであろう。民主運動について、興味深い証言がある。小熊謙二氏は1925年北海道生まれ、早稲田実業を1942年12月正規課程より一年三ヶ月早く繰り上げ卒業し43年1月富士通信機製造に入社、同期入社約20人のうち12人が早稲田実業、そのうち5人が繰り上げ卒業であつたが⁶¹、44年10月30日幹部候補生試験に落ちた陸軍二等兵として東京中野区で入営⁶²し、44年12月3日渋谷駅を発して、12月28日ごろには牡丹江の電信第17連隊のもとに到着した⁶³。45年8月28日ごろには安東に移動させられていた彼は事実上の武装解除、9月15日ごろには奉天に移され、ソ連軍兵士をそこで初めて見た⁶⁴。その後、シベリアに抑留された彼は次のように述べたという。「反動摘発は初

⁶⁰ 柴山光男（第二〇三六六部隊）「私の抑留記—ピロピジャンを起点として」『捕虜体験記』IV、ハバロフスク地方篇、222頁ほか。

⁶¹ 小熊英二『生きて返ってきた男—ある日本兵の戦争と戦後』岩波新書、2015年、46頁。本書はある庶民（著者の父親）の戦争および戦争後の体験をつづった貴重な記録であり、教えられることが多い。

⁶² 小熊、同書、2頁。

⁶³ 小熊、同書、63～64頁。

⁶⁴ 小熊、同書、83頁。

年兵へのいじめに似ている。旧軍の内務班では、夕食後の時間に、銃の掃除がなっていないとか、態度が生意気だとか、適当な理由をつけて『心得が悪い』と反省させられたり、殴られたりした。その行動様式が、そのまま民主運動の形で行われた⁶⁰⁾。また「民主運動を積極的にやっていた人間には、いくつかのタイプがある。まず農民や労働者出身で、性格が素直なため、自分の境遇を説きあかしてくれるものとして、マルクス主義をそのまま受け入れた人、これは若い人が多かった。若い青年将校や、満蒙青年開拓団出身の青年などにも、このタイプがいたという話を聞いたことがある⁶¹⁾。彼は1948年8月、帰国している。兵士としての小熊氏は大井氏の体験に近い位置にあったわけである。

さて、大井氏は、当初は切羽の労働から、炭鉱作り（坑道の壁面など建築作業などをいう）の職場に移動、こちらのほうが楽だった。バルハシ収容所で働いた酒井為安氏（満州第383部隊）によれば、「所内の民主化運動が盛んになり、全員階級章を取りはずすことになり、将校も兵卒も見分けがつかなくなったので、われわれ兵卒は大助かりだった。シベリアの果てまで来て地獄の苦しみをなめながら、なお旧日本軍隊そのままに、上官だ、兵卒だ、当番だ、ビンタだと、まったくばかげたことである⁶²⁾と述べている。あるいは入ソ当初は「軍隊の階級章をつけたまま曹長や少尉あたりが特権をふりまわし、長さ七、八メートル、直径七、八〇センチくらいのモミの丸太を雪の中から掘り出し、四、五人で歯を食いしばりながらかつがされ、むちでもって牛馬のごとく酷使された。ソ連人につかわれているのか日本人にこきつかわれているのか、わからなくなることがしばしばだった」という証言⁶³⁾もある。こうした事実や、階級の上位の人たちには食糧配給などで優遇が行われたり、労働現場では指揮のみで、時には食糧を含めて中間搾取が行われたりすることへの反発が、後に階級制を否定した指揮権の確立や、民主化運動への展開を見たということであろう。

【9】 鉱山の日常生活

炭鉱では食事として労働前と労働後にそれぞれ700グラムの黒パンと葉っぱが少し入った岩塩を溶かしたスープで、それでも食糧としては十分だった。黒パンの分量は初めから少なくはなかった。炭鉱労働に従事していたからだろう。地上の労働では黒パン350グラムとされた。この黒パンがうまいかどうかはあまり考えていなかったが、バザールなどで白パンを得たときには、こちらはうまいと感じたという。静岡県榛原郡金谷町（現島田市）のある人は収容所の外で白パンを買っ

⁶⁰⁾ チタ第24地区第2分所に収容された人物。小熊、同書、159頁。小熊謙二氏は民主運動の基本がソ連側の指導にあったという認識の元ではあるが、同時に旧軍時代の上官側の態度に対する反発が前提にある一面も認めている。

⁶¹⁾ 小熊、前掲書、162頁。

⁶²⁾ 酒井為安「シベリア抑留生活記」『捕虜体験記』V、250頁。

⁶³⁾ 大島治孝（満州第二〇〇〇部隊丁隊）「故国は遠い」『捕虜体験記』IV、ハバロフスク地方篇、252頁。

てきたが、それはたしかにうまいとは思ったが、つまり通常、黒パンが一日二回供給された。このパンを三回に分けて食べた。三回に分けても充分だったと記憶する。この食糧の配給についても、当時の戦後復興の下でのソ連の貧困状態からすれば、充分であったとする証言も見られる。大井氏もそれに類する感想を持っていたという。他の証言では、食糧の一人一日量は黒パン350グラム、雑穀450グラム、野菜800グラム、肉30グラム、魚150グラム、油7グラム、砂糖18グラム、塩10グラム、紅茶1.5グラム、たまにはカーシャ（米）とも伝えられている⁶⁵⁾。もっとも「食事にしても、なにかとクリームをつけて古年次兵たちがとりあげ、朝食や昼食ぬきで伐採の仕事を強制して、そのため栄養失調でバタバタ倒れ死亡者もかなりの数にのぼったということである。たとえば、黒パンの配給にしても一人当たり三五〇グラムときめられているが、この部隊では大きいほうから小隊長、班長といった順に「上官殿」が分け合うため、初年兵の口に入るのはマッチ箱くらいのほんのひと口で終わってしまう。そのパンさえもとりあげられることがあったという⁶⁶⁾、というわけで、軍部隊ごとの収容であったことから、戦前以来の上官が下士官、兵をいじめる状況が持続していた。「食事はコッペパンの四分の一くらいの黒パンと、小さい馬鈴薯が一個入った岩塩のすまし汁が飯盒の蓋に一杯だけというお粗末なものだったが、もし旧軍の「軍紀」がそのまま続けられていたら、将校・下士官が先に大部分を取り、兵隊はもっとみじめな思いをさせられたことだろう⁶⁷⁾という証言もある。実は上官は一日中、兵たちの労働に対して差配しているだけで、下から見ると「のうのうとしている」という不平があったという⁶⁸⁾。

大井氏によれば、30歳以上の人たちにとっては炭鉱労働がつらいので、地上労働にまわされていた。食料も1948年4月と49年4月の物価改革の結果、日本人捕虜の労働意欲を高め、しかも割増賃金が現金で支給されるようになったという。その結果、「夢にまで見た」二キログラムパンをバザールなどで手に入れることができた⁶⁹⁾。あるいは食糧供給の不十分さを伝える証言もある。たとえば収容所に到着した当初のことのようであるが、「食事はあわれで、みじめだった。朝晩とも小豆のスープ一人前飯盒八分目くらい、という聞こえはよいが、入っている小豆粒は数えるほどしかなく、あとは小豆を煮た汁だけ。これでは餓死させるには何日もかからないだろうと話し合ったほどであった⁷⁰⁾」。小菅氏の証言はレンゲル収容所でのことである。少なくともこの食糧では、強制労働の中で働くことも出来ないだろうし、たしかに生存が保証できないだろう。だから

⁶⁵⁾ 川堀耕平『カラガンダ第八分所』75頁。

⁶⁶⁾ 泉雅行「スパスク病院・第22収容所」『捕虜体験記』V, 75頁。

⁶⁷⁾ 坂本弥一 [満州大五四九部隊]『カラガンダの炭鉱地区で』『捕虜体験記』V, 122頁。

⁶⁸⁾ 指揮命令系統についても「ソ連ではまったく制度がちがっていて、すべて組織や命令系統が縦割りであったから、直属以外の命令にはきくひつようがなかったのである。だから、直径以外であれば階級は上でも、敬礼をする必要もなかった」（斎藤邦雄『シベリア抑留兵よもやま物語』光人社NF文庫、2006年、240頁）と驚きを隠せない証言もみられる。

⁶⁹⁾ 泉雅行「スパスク病院・第22収容所」『捕虜体験記』V, 89頁。

⁷⁰⁾ 小菅荒三郎 [満州第336部隊]『私の俘虜紀行抄』『捕虜体験記』V, 230頁。

労働直後には風呂の用意や大きなパンが用意されていたとも証言を続けている⁴⁰⁾。また、この証言では、ソ連側がノルマによる賃金支払いを開始したところ、その計算方法に問題があったか、日本側には不平不満という状況で、ソ連側支払いを日本側経理部に全額支払わせ、平等分配を行って、問題を解決して、自由に物資を購入できる「一サラリーマン的捕虜」となったという(同、234頁)。

こうして捕虜も労働意欲を發揮し、収容所長から賞賛を受け、食糧事情も改善され、日本人同士のマージャン、将棋、囲碁などの競技も始まり、そのうち楽器を手製で作り出し歌謡コンクールや演芸会、俳句会まで行われ始めたという⁴¹⁾。ノルマ達成のための仕掛けもあった。それは兵士相互の親睦を阻止し、逃亡やサボタージュを防ぐために、ほぼ毎月一回程度の編成替えを行い、毎週一回程度の私物検査を行い、めばしいものの没収、密告を奨励、夕方にはマースチェル(мастер: 監督)がやってきてノルマのパーセントを決めて、ノルマ達成に対して黒パンの増給を行うなどである⁴²⁾。

大井氏によれば、トイレは収容所の外にあり、大きな穴が掘られていて、それを差し渡す「棧橋」がかけられていた。大便はたまりっぱなしで、小便はトイレに行くことはなく、中途で行った。よく指摘されているシラミについては満州時代に独立歩兵部隊に属していて、当時は馬を配備されていたために、馬から人間への伝播があった程度で、抑留時代には基本的になく、発生したときにはソ連側が駆除・消毒してくれていた。収容所内での病気はほとんどなかった。帰国後に米屋を開くと期待していた人物が急性盲腸炎を2、3度発病して死亡したことはあった。トロッコで足を引かれた人はいたし、働けなくなった人は抑留を中断して送還された。上官は銀時計を持つ少佐のほかは殆どいなかった。この人物は日本大学出身で、北支部隊から来た良心的な人だったから、トラブルはなかった。そこでソ連側の「民主運動」の指導も見られなかった。

給与条件はどうであったか? 回想記録によれば、当時のソ連労働者の給与と比較して遜色が無いほどの金額を受け取っていたというのが見られる。その金額とは、当時、特に1948年の物価改革、賃金改革以降、ロシア人労働者が最低賃金制金額500ルーブルに対して三食・宿舍付きの日本人捕虜が200~500ルーブル程度で、ロシア人の羨望のまなざしであり、ソ連自体が戦後復興期であることを思えば、相当な金額であったと回想する証言もみられる。大井氏によると、炭鉱労働や技術労働では1,000ルーブル近くの受け取りも見られたという。収容所では労賃が出たところと出なかったところがある。経営状態のよい収容所では給与が出ていたらしい。この点でも、「捕虜の収入は、私たち雑役労働に従事している者でも多いときは一〇〇ルーブル以上に達した。な

⁴⁰⁾ 同、233頁。

⁴¹⁾ 同、235~237頁。

⁴²⁾ 酒井為安 [満州第383部隊]『シベリア抑留生活記』『捕虜体験記』V、255~256頁。

かでも技術労働者で多い者では五〇〇ルーブルにも達した。ロシア人労働者最低賃金制金額（月額）が五〇〇ルーブルであったことを思うと、三食・宿舎付きの日本人捕虜が二〇〇～五〇〇ルーブルの収入を得ていることは、彼らロシア人たちの羨望のままとなった」との証言も見られる⁴⁴⁾。なお国際法上では、捕虜となった人々への給与は、送り出した側の国が負担すべきこととされていたが、日本では戦後一貫して、そうした補償は行われていない。

また斎藤六郎氏は次のように記述する。「抑留当初に科せられた労働ノルマはソ連人と同じレベルであったから体力に劣る日本人兵士はエネルギーを消耗し加えて衣食住ともに低劣で、死者も多く最初の一冬で全死亡者の八〇％前後に及んだ…。ソ連側の取扱いが、改善されたのは昭和二十二年初期からである。この頃になって日本人に適した食糧、労働ノルマが制定され、収容所の警備も日本に一任。食糧もそれまでの馬糧高粱や燕麦に代わって黒パンが定食となり衣服もソ連製のフハイカ（綿入れ防寒具）が支給され、兵舎にも照明がつき暖房も改善された。とりわけ、病院設備は医師、看護婦、薬品などが急速に整備され、簡単な手術も可能になった。日本人の死亡は、この頃になってようやく急減した⁴⁵⁾と伝えている。野村正太郎氏（第59師団、師団通信隊）はソフガワニでの回想で「私たちの収容所には初めから給与に関する『国際捕虜規定』が、ロシア文字と日本文字で書かれて貼り出されていた。それによると、食料は将校と下士官・兵とでは違っており、将校は質はいいが量が少なく、下士官・兵は質はおちるが量が多少多くなっていた。しかし、そのとおり支給されているとはだれも信じていなかった⁴⁶⁾。大井氏によると、補償問題により関心を持たれ始めるのは、海部俊樹首相の時期だという。そして2005年前後には野党側から補償支払いの法案が提出されたものの、小泉純一郎内閣の郵政解散で、頓挫し、その後はその動きすらまったくない⁴⁷⁾。

音楽その他の文化活動などの状況は？また楽団を組織して巡回したという記録もあるが、どうだったか？大井氏によれば、たしかに演芸会、演芸コンクールや合唱、楽器演奏と合唱などが行われたというが、特に、カラガンダの現地では、日本人が帰国されては困るという風に上層部に働きかけがあったと記憶する。この記憶は他の証言録や旧ソ連の公文書類の発掘である程度正確だったようである。大井氏の場合、カラガンダでの働き始めは1946年10月からであった。地上勤務では劇場作りも行われたが、大井氏はその途中で帰国した。他にもKGBビル、住宅の建物等さまざまあり、今日でも利用されているものがある。坂根曹長は芝居のために工作するなどして、辰巳竜太郎一座の新国劇団員もいて、新国劇を演じる集団や、民謡を歌う人たちも出たが、歌謡や夏には盆踊りをするなどがあったが、静岡県人はなぜかそうした踊りもする人はいなかったよ

⁴⁴⁾ 泉雅行「スパスク病院・第二収容所」『捕虜体験記』V、90～91頁。

⁴⁵⁾ 斎藤六郎『シベリアの挽歌』295頁。

⁴⁶⁾ 野村正太郎「私の抑留体験記」『捕虜体験記』IVハバロフスク地方篇、1985年、8頁。

⁴⁷⁾ 栗原俊雄『シベリア抑留—未完の悲劇』岩波新書、2006年。

うだ。時に東京の音楽学校出身の人物が鉱山の入り口でバイオリンを弾いてくれたこともあるが、余りうれしいと思うことはなかった。音楽などの人たちも炭鉱労働をやっていた。映画会もあった。毎週一度は休日だったので、その日を利用した。給料を得ていたから楽器を買うことも出来た。演劇を含めて俳句や短歌のサークル活動、壁新聞発行など一連の文化活動については、次のような元軍医の証言がある。これは脚本演出を手掛けたイズベストコーワヤ Известковая 第4地区の報告である。「これ〔他の分所での演劇活動等〕に刺激を受けた私たちは、俳句・短歌のサークル活動や壁新聞の発行などで多少の文化活動への目醒めつつあった機運に乗じて、ただちに劇団結成へと漕ぎつけたのである。こうして私たちの収容所の文化活動もまざまざのところまで発展してきたが、これらはまったく自主的に進展していったもので、ソ連側の干渉や押しつけがましい指導は一切なかった。ことに演劇における思想的傾向やテーマについてもなんらの干渉を受けたこともなく、食堂にある舞台の夜間利用について了解を求めると、『オーチン・ハラショー（たいへんけっこうです）』と力づけてくれるだけで、内容について質されたことは一度もなかった。むしろ日本人ことに民主グループのアクチヴなどが、きびしい批判を向けてくることが少なくなかった⁴⁹⁾。むろんこの証言ですべてを言い尽くされたとはいえない。他の証言の中にはソ連側所長の指示で日本の軍国主義的な、あるいは前近代的な演目に介入し、中止させたという事実もあるからである。要するに現地の裁量の幅が、管理者の裁量にゆだねられていたというふうにもみえよう。

[10] 帰国のめどへの不安

1948年12月でも帰国のめどなし。

1949年5月「日本新聞」で50万人がすでに帰国と知る。しかも抑留者9万5千人はすべて1949年中に帰国させると記されていたというのに、兵隊は何も知らされず希望もなく日々を過ごしていた。日本新聞も当初は10人に一部程度しか配布されていなかったために十分に読まれていなかったとか、その後は3、4人に一部は配布され、日本語に飢えていたのでむさぼるように読んだという証言があるが、大井氏は、この新聞のある日の記事に日本人が5,000人帰国したという記事を発見し、希望を見出した。それまでは帰国の確信は持てないでいた。当時、炭鉱で働いて、外に出てきて東條英機が処刑されたことを知った。1948年のことだったと記憶している（12月23日）。収容所の外では子供が寄ってきて、持ってきた玉子を買ってほしいというので、買ったこともある。軍隊では鉛筆もくれないので、その以前には記録をつけることが出来たのが不可能になった。なお大井氏はこの「日本新聞」をよく読んでいたほうだったという。子供たちはもちろんだが、現

⁴⁹⁾ 岡崎正義 [威第九一九一部隊]「哀愁のシベリア劇団」『捕虜体験記IV』, 180～181頁

地の人々は決して民族差別的な見方をすることはなかった。なお奉公袋の筆記具と洗面具、千人針、国旗は携行を認められたとされるが、入隊後は紙も鉛筆も支給されなかったという⁴⁹。1948年前後の物価改革を経てであろうが、カラガンダの出張バザールやマガジンでショッピングを楽しむほど豊富な品ぞろえがあったと泉雅行氏は証言している⁵⁰。この点は大井氏の証言とも合致する。『日本新聞』の配布のほかには壁新聞の発行を奨励された。「二年目のいつごろであったか、時期ははっきり覚えていないが、グシーニのラゲルでも壁新聞を発行して文化活動をやれという指令が出された。従わないわけにいかないの、日本側で自主的に人選した結果、なんとかできそうな者を集めて編集した。そして、一枚の大きな白紙（大型のポスターくらいな）に鉛筆で書きこんで貼り出し、読みたい者が読むという仕組みで、別にソ連側の検閲もなく、終始すべて自主的に運営された。」⁵¹

[11] 収容所での教育

毎日、労働の後に夜になるとロシア〔ソ連〕共産党史や史的唯物論の勉強が強いられた。教師はアクチーブ（積極分子 актив; active）と呼ばれた日本兵だった。大井氏によれば、彼らは要領よく立ち回ったのだろうという。確かに要領よく立ち回って本来、そのようなアクチーブとなるはずもない将官も見られたが、ただしその場合には、現場で見抜かれて処分をされたものもいるという証言がある。大井氏の場合、肉体労働を終えてからのこの勉強はきつく、疲れて4回、怪我をした。最後には炭車が脱輪脱線の事態になった。

寝る間もない勉強はきつく夢遊病のようにふらふらと働きに行く状態だった。怪我のため劇場建設（後に「ポリショイ劇場」と名称された）に回らされた。ここでは大工や左官は技能を持っているので楽だったようだ。大井氏は一輪車で輸送に従事。なお現地での労働の指示は、すべて日本軍の階級制にしたがって、ソ連側の指示を「上官」が受けて、これをわれわれに指示したので、ソ連側が直接に大井氏たちに指示することは一切なかった。また日本軍の下士官などが旧上官を「つるし上げる」ことが行われたが⁵²、当初、「つるし上げ」とは体を具体的につるし上げるのだと思っていたほどである⁵³。他の人の回想には、上官の横暴、ソ連側から配分された食糧の

⁴⁹ 川堀耕平『カラガンダ第八分所』溪水社、2008年、15～16、34頁。

⁵⁰ 泉雅行『スパスク病院・第二収容所』『捕虜体験記』V、92頁。

⁵¹ 佐藤公一・第134師団第365連隊「ニコライエフスク・第四分所」『捕虜体験記』IVハバロフスク地方篇、1985年、80頁。

⁵² このような「愚行はどこから生まれるのか？批判精神のない日本人の奴隷根性からだろうか？それとも、俘虜のあいだにこのような愚考を意識的に組織しようという勢力があるのだろうか？おそらく、その両方だろう」と高杉一郎は帰国直後に語っているが、現場での実感でもあったことが伺えて興味深い（同氏『極光のかげに』目黒書店、1950年、317～318頁）。

⁵³ 「槍玉にあがるのは程度の悪い、ごくわずかの人たちであった。…兵隊からよほど恨みを買った人であった」（齊藤邦雄『シベリア抑留よもやま物語』光人社NF文庫、2006年、221頁）。

横領、一部収奪、旧軍のままの指揮命令による支配などがあったことが、下士官・兵士の反発をかってつるし上げられたり、上官は下部に働かせて、自分はゆったり過ごすなどがある、下部に不満があり、あるいはソ連側からの指示を受ける立場を、下士官等が代わって受けるなどが見られたという。上官への反発が民主化運動を自主的に組織する結果を招いた面と、ソ連側がこの運動を黙認していて、その後はその運動に対してソ連側が積極的に協力したという証言もある。もちろん運動に便乗して加わった旧軍上層部の人物もいたようだが、そのうち見破られて糾弾されたという証言もある。

ノルマ単価に働き場による相違があるなどの不満は？ノルマで記憶されている内容は何か？どうして決まったか？ノルマ達成で困ったことは？日用品の購入の場はどうであったか？マガジン（国営商店）、バザール（市場）などがあったという記録もあるようだが、ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会『捕虜体験記Ⅷ民主運動篇』1992年においても、カラガンダでの「民主運動」の状況が記録されている。そもそもは、旧軍体制を維持し続けることを前提にしたソ連



大井氏がカラガンダの
マガジンで購入、
130ルーブル程度

軍による捕虜統治政策が、「上官」の横柄を残存させ、これに対する下士官・兵等からの反発が、自主的な上官排除運動となるが、それも、その後のソ連側による組織化⁶⁴で、互選による代表者選出が要請され、結果としてソ連側の意向に沿った捕虜組織が誕生したといえるだろう。この点、ナチ・ドイツ軍捕虜は、ナチ軍隊組織を守っていたという⁶⁵。

大井氏の場合、炭鉱労働で賃金を受け取っていたので、この金額は相当に高く、貯蓄も出来たし、外での買い物も出来た。給与も300ルーブル程度であって、食事も宿舎もあてがわれているので、充分であったと思う。そこで大井氏は、マガジンで懐中時計を購入した。

[12] 捕虜通信

大井氏たち99地区分所の人々は、共産党に染まらず不良人間とされ最後まで働かされた。

1948年ころには、上層部から捕虜通信を発行してもよいといわれたが、自分たちは捕虜などと思っていないし、軍隊組織のまま生きていたことから、この判断には同調できなかった。とはいえ、これに対しては日和見だと批判を受けたので、おそらく帰国する1949年までに5、6回は発行したと記憶する。その内容はすっかり忘れたが、基本は、日常生活の報告記録であった。しかし国会では野坂参三（徳田球一？）によって「共産化しない兵隊はかえさないでくれ」とソ連に

⁶⁴ 民主委員会委員長、政治部2、文化部1、生産部1、生活規律部2、衛生部1、青年部1 [川堀耕平「カラガンダ第八分所の美術展」『捕虜体験記』V、118頁。

⁶⁵ 泉雅行「スパスク病院・第二収容所」『捕虜体験記』V、83頁など。

告げていたと聞かされていた。これについてはソ連軍将校でこの趣旨のことを言い触れて歩いてきた人物がいたという⁶⁰。

先に帰国していた見習士官（菅季治氏のこと）は国会に呼ばれ「ソ連は不可侵条約を破りアメリカは原子爆弾を我が国に落とし、どちらも信用できない」と嘆き鉄道自殺をするなど、見えない現実に、大井氏たちは生きる望みもなくしていた。

ただし、これは正確ではない。徳田球一、あるいは野坂参三がこれを主張していたとされた、当時の日本の国会での証言や、記録資料から、日本共産党指導部は確かに抑留者の共産化（民主主義的人士）を図ったソ連に感謝して、日本側の抑留者帰国運動を受けて、ソ連に対して帰還促進方を要請していた事実も知られている。また日本共産党指導部が、ソ連側に対して、民主主義的人格に変革して帰還させたことに感謝したという事実があったとされる。斎藤六郎氏の認識によれば日本軍上層部が、実は収容所でも依然としてノルマの給与のピンはねをし、また配給された食糧のピンはねをする、あるいは下士官兵に対して依然として横柄に命令するなど相当にひどいことを行っていたことから、逆にソ連に対して一定の民主化を教育してくれたのはよかったという。

もっとも当時の日本共産党はソ連一辺倒だったので、「民主的人士」になってからの帰国を希望していたかもしれないが、今や資料もないので不明とされている⁶¹。

さらに斎藤六郎全国抑留者補償協議会長の片腕であったエレナ・L・カタソノワは、敗戦前後の日本政府自身がシベリア抑留者をソ連の戦後復興に活用することを容認したと厳しい批判を記録している⁶²。より正確には敗戦直前1945年7月の時期の近衛文麿のソ連派遣によってアメリカとの戦争終結を密かに探ろうとした日本側が予定していた文書では、ソ連に抑留された兵士、一般人の復興への労働協力を認めた内容さえあったというのである。その後のことではあるが、スターリンを最高指導者として、この方向に類似する方針が立てられた。確証は見当たらないとはいえ、スターリンに日本側の認識が何らかの意味で伝えられていたと想定されるか、彼にとって戦後復興が急務なので、偶然の一致かといえる。先にあげた富田氏の著作によれば、ソ連の諜報部門の状況から見て、近衛の手渡そうとしていた文書がソ連駐在大使館等からすでにわたっていたか、あるいは諜報活動で状況を知りえていたかもしれないとされている⁶³。

⁶⁰ この点については、事実関係は不明であるが、高杉一郎『極光のかげに』目黒書店、1950年、272頁には逆のことが指摘されている。すなわち、根っからの反ソ、反共では使い物にならないと判断されて早期に返されたケースとともに、ロシア語が分かり、満鉄に在籍していたことからスパイ嫌疑とともに利用可能な人物は逆に帰還が遅延させられたという。

⁶¹ 富田武『シベリア抑留者たちの戦後』人文書院、2013年、またソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会編『捕虜体験記』全Ⅷ巻などを参照。

⁶² エレナ・L・カタソノワ『シベリアに架ける橋—斎藤六郎全抑協会長とともに』恒文社、1997年。

⁶³ この点、近衛文麿の「和平交渉の要綱」の「賠償として若年兵の労力提供を認める」との文案や、関東軍参謀瀬島龍三、秦彦三郎参謀長らが関与していた模様だとの認識を斎藤六郎氏は述べている（斎藤『シベリアの挽歌』

そればかりか齋藤六郎氏の発見した「大本営浅枝（繁春）参謀」などと記載された1945年8月26日付「軍方面停戦情況ニ関スル実視報告」には武装解除後の軍人と居留民の居場所や生活状況を記したうえで、「今後ノ処置」が記載され、「一般方針」は「内地ニ於ケル食糧事情及思想経済事情ヨリ考フルニ既定方針通大陸方面ニ於テハ残留邦人及武装解除後ノ軍人ハ「ソ」連ノ庇護下ニ満朝ニ土着セシメテ生活ヲ営ム如ク「ソ」連側ニ依頼スルヲ可トス」と表記されていて、この方針は1945年8月21日、新京に進駐したソ連軍コワリョフ大将、フェドレンコ中將らと会談した際には伝えられたと判断されるという⁶⁰。以上の件は共同通信が1993年8月13日の各紙に配信、報道され、その際、浅枝氏の「懺悔したい」との発言も報じられた。状況から見てこのような重大な判断は梅津美治郎陸軍参謀総長らの意向を受けていたとみるべきだという⁶¹。もっとも草地真吾元関東軍参謀大佐のように、齋藤氏らの指摘にもかかわらず、関東軍がそのようなことをしたわけではないし、将兵の帰国に尽力していたと事実を覆い隠す発言を繰り返す人も現れたという⁶²。先の諜報活動とか近衛文書以上に信ぴょう性が高い、史実とさえいえるように思われる。とすれば、栗原氏も酷評するように、当時の日本指導部の、まさに軍人勅諭に始まり戦陣訓に至る兵士の生命を体制維持のためには虫けら（鴻毛と心得よ＝軍人勅諭）のように扱う姿勢と共通しているといわざるを得ない。

他方、ヴィクトル・カルポフは「日本は、スターリンがポツダム会談に出発する前に、戦争終結に関して西側大国との仲介役になるようソ連に依頼した」と指摘し、その注釈として「日本は無条件降伏を避け天皇制を護持するため、米英との講話の仲介役にソ連を選び、近衛文麿を特使として派遣することに決めて会見を申し入れたが実現しなかった... 賠償として、『労力の一部』を提供することが含まれていた」⁶³と述べている。この注釈は抑留体験者である故・山本敏元明治大学教授によるという。ただし必ずしも立証となる資料を提示しているわけではないが、本書自身が「ソ連機密資料が語る全容」とあり、ゴルバチョフ時代以降の旧ソ連及びロシア連邦共和国成立直後のエリツィン大統領が公開した機密文書を活かして展開されているという事実は大きい。

またすでに知られているとおり、日本の俘虜問題以前にドイツ、ハンガリーなどの捕虜を労働

終戦史料館出版部、1995年、132、134頁）。齋藤氏が糾弾するのは、その後になって、瀬島氏が現地での対ソ連軍交渉において捕虜の早期返還を要求したというが、それを証明する資料は一切なく、むしろ秦氏と共に、国際法への無理解だという点である。さらに旧ソ連公文書が公開されて、1993年7月6日モスクワからの共同通信情報で瀬島氏が直接に関与した文書では「降伏日本兵を貴軍経営のため、どうぞお使いください」とあり、関東軍が積極的に日本軍兵士をそれに差し出したことが明白になった（前掲同書、137頁、139頁）。

⁶⁰ 齋藤六郎、前掲同書363～380頁にオリジナル資料が復刻されている。この文書はワシレフスキー司令官に提出され、急ぎロシア語に翻訳する旨が付され、モスクワのスターリン、ベリア、ブルガーニン、アントーノフをメンバーとする国家保安委員会に回送された（146頁）。

⁶¹ 栗原俊雄『シベリア抑留』岩波新書、158～161頁。

⁶² 齋藤六郎、前掲同書、150頁。当の本人の起案文書が、天皇上奏文としてロシアからその後も出ているというにもかかわらず（齋藤、前掲同書、151頁）。

⁶³ ヴィクトル・カルポフ、29頁。

動員していたという事実が重要に思われる。大井氏が動員されたカラガンダでも、日本の捕虜がドイツ捕虜の収容所を利用したことを指摘しているが、これと関連する。カルボフの書物では日本軍捕虜のこうした活用について1945年までには決定していた事実を挙げている⁶⁴。大井氏のカラガンダ収容所はドイツ兵士の収容所だった施設を利用されたので、他の収容所の記録のような、その場所に到着して一から施設を建設する必要がなかったのである。

また大井氏によれば、阿南陸相が切腹自殺するという悲劇あり（1945年8月15日）、内地の人達からはソ連がえりは「共産党にかぶれた人間だから気を付けた方がよい」と冷たい目で見られていた。それでも帰国後のことであるが、父親が学校に職があったので、戻れとのことで近くにあった県榛原教育事務所に務めることになったが、ソ連の話は一切しなかった。友人も極力近づくことはなかった。それでも十年近く学校を転々として厳しい眼を感じた。大井氏は、父親譲りの共産党嫌いで、とうとう日本人のアクチブの活動や教育に染まらず帰国したという。大井氏は、この齋藤氏の協議会には文書を通じて協力したことがあるということだった。

[13] 帰国問題と親ソか、反ソか

第99地区分所は、ソ連になじめない人が多く、帰国が遅らされたようだと大井氏は認識している。帰国後、日本の国会で証言した見習士官（管季治）が鉄道自殺という痛ましい事件もあった。富田武『シベリア抑留者たちの戦後』でも指摘されている通り、1955年の時期にも一定数の残留者がおり、なかにはロシア人女性と結婚して、ロシアに永住した人物もいる。しかも戦陣訓の「生きて虜囚の辱めを受けず」との思いで、祖国に帰還することを好まずとの意識にあった人もいるという。大井氏は、カラガンダ鉱山での労働の結果、帰国後10年ほどして肺気腫に襲われた。それは防塵マスクなどを着用することがなかったためと思われるとのこと。しかしその後、5年ほどでこの病状も出なくなった。

1949年9月29日 ようやく永徳丸でナホトカから舞鶴に到着⁶⁵。カラガンダからナホトカに着くとソーラン節にのせたソ連賛美の盆踊りで歓迎を受けた。大井氏はそれ自体、奇異に感じたという。どうしてソ連が賛美できるのかと。

舞鶴に帰国して初めて風呂に入った。むろんカラガンダでは鉱山から帰るたびに西洋式のシャワーのようなものに入っていたが、まるで行水で、ゆったりとした記憶がない。いわば行水してからすぐにペーチカで体を温めるのがせいぜいだった。現地の男性は手ぬぐいも持たない。舞鶴に着いて、そのときの日本酒もうまかったなと思う。ウォッカはうまくないので、帰国に際して

⁶⁴ 長勢了治訳『スターリンの捕虜たち』北海道新聞社、2001年、45頁。

⁶⁵ このときの乗船者数は2,000名と記録されている＝『舞鶴地方引揚援護局史』附表第二 船別入港上陸日、乗船人員区分一覧表』により作成された、『捕虜体験記』I 歴史・総集篇、1998年、316頁。

は、カラガンダで得た物品や貯金は持ち帰り自由だったという。大井氏も貯金はした。先の懐中時計を今も大井氏が保存されているのもその事情からである。ただし、持ち帰ったものは帰る途中、日本国内で、半分以上盗まれたという。それもソ連側からではなく帰還する日本人の問題であった。なお戦地からの大井氏の手紙などは一切、大井家には保存されていない。それは父の後妻が廃棄した模様だという。

1924年生まれの大井比留間次郎軍曹の記録では、徳田球一が帰国させるなどといったと述べている。見習士官（管季治）が言ったとのこと。「民主化された人たちが帰ってくるのはいいことだ」と他の証言記録にはある。たしかに当時、ソ連側でO（残留）、Π（活発な反動活動）、P（反動）の三つのカテゴリーに分けることで、本国帰還者リストに類別されていたという。送還第一陣では日本側将校たちの対抗で、実際にはソ連側の規定する反動層が帰還に成功したといわれる⁶⁶。管は日本の国会で徳田球一らの発言やそれによりソ連側が帰国を遅らせた事実はないと証言したが、当時の国会では認められず、ついに自殺に追い込まれたとされる。

なお、この帰国に関しても、「アクティブ」に支配されたところでは、死者を生むことが多かったが、これに対してソ連の思想教育に同意せず日本軍の軍隊組織を維持していたところのほうが、犠牲者が生じなかったとの認識も見られる⁶⁷。

[14] 帰国後の生活

帰国直後、1950年1月県榛原教育事務所に一年勤務（県教育事務所の人と知り合いであったことから）。妻てるさんによれば、大井家は江戸時代から続く旧家で、素封家であったことが、大井氏の教職に戻りやすい状況を生んだのではないかということであった。

1950年4月、沢村てるさんと結婚。

その後、1952年4月4月から吉田小学校5年間（横山亀太郎校長、ただし校長に級外にされる〔ソ連がえりて何を生徒に吹き込まれるかと恐れたのだろう〕）。

1957年4月川崎小学校に3年間勤務（ここの校長先生は理解ある人だった）ののち、1960年3月父が大腸炎で40歳の若さで死去し、大井氏は教職を退職、同年4月以来、結婚を機に江戸時代から四百年來続く家業の井筒屋陶器店を継ぐ。日に日に忙しくなり妻と共に記念品、引き出物等々包装、配達と、多忙で商売も軌道に乗り井筒屋を再興した。陶器店・タバコ・バス切符を販売し、茶畑を営む。家の前は駿遠鉄道線の駅（静波駅、現在はしずてつジャストラインの静波一丁目（元は地方鉄道線駿遠線）、もっともウェブサイトでは牧之原市役所・文化センター前が旧静波駅と

⁶⁶ 前掲『スターリンの捕虜たち』128-129頁。

⁶⁷ 栗原俊雄『シベリア抑留—未完の悲劇』岩波新書、103頁。

している。「廃線探索静岡鉄道駿遠鉄道線」⁶⁸⁾があった。この井筒屋陶器店は妻と2人で小売のほか注文品の陶器・磁器の包装や配達を行う。

1970年、50歳で社団法人倫理研究所に入会、静波実践部委員長、榛原準支所長などを歴任。

ソ連時代のことは徐々に忘れ、大型の自家用車で配達に明け暮れ、楽しい時間を過ごし、男1人、女2人の子供にも恵まれた。

とはいえ、今回のインタビューの状況からしてもおよそ70年超にも達する戦後の長い期間を経ての回想を話される限り、ご本人は内面的には決して消し去ることのできない捕虜生活だったであろうことは十分に、理解できるだろう。

職歴としては、戦前の小学校勤務4年、軍勤務2年、抑留期間4年、教育事務所1年、小学校勤務5年で通算15年間として年金に加算されている。

この「70年間、日本が平和で来たのはよかった」と述べている。

また、2016年4月1日、電話により聞き取りした。その内容は以下のとおり。

1944年の5月15日の召集された集団だけで戦友会を組織していた程度だ。このときの召集兵は中学で、浜松商業、島田商業、また体を壊したために第二補充兵でとなった早稲田の学生など高学歴者が多かった。ご本人は上官の勧めで幹部候補生の資格試験を受けろといわれたが、これを拒否し、上官に「貴様は共産党か」と叱責されたことがある。この趣旨はご本人の5月1日の証言では、体重面での不十分という認識もあってのことである。実はこの戦友会もばらばらで、比留間軍曹とは今もお付き合いがある。彼は予科練4年の歩みをまとめている。その回想記にも大井氏のことが登場している。シベリア帰還者のさまざまの組織があったが、ご本人には特別に誘いかけはなかった。しかし半分冗談で「共産党に入っておけばカッコウがよい」といったことをはなしていたことがある。大井氏は、父親譲りの共産党嫌いでもあり、他方で戦争に徹底的に心酔したわけではない。「頑固だもんでね」と。今となっては、カラガンダも勃利も行きたくはないが、博多から出航したので、博多には行きたいが。

比留間軍曹とは、比留間次郎氏。1924年東京生まれの第5練習飛行隊入隊、1945年錦県で終戦を迎える。終戦時、第5練習飛行隊軍曹、収容所はカラガンダ、1949年舞鶴に復員、復員後は航空自衛隊に入隊した比留間次郎氏のこと。NHK戦争証言アーカイブズ(2010年6月17日収録)でネット⁶⁹⁾に搭載されている。比留間軍曹の記録では以下のように記録されている。「大井篤郎さんは静岡県出身。師範学校卒業し、入隊、小柄だが柔道の有段者でソ連兵も一応認めていた。帰国後も文通している」と。スパースクの病院に入院した人で、比留間さんも知っている人が、そのままいついてしまった。その人が現在もカラガンダに居住してい

⁶⁸⁾ <http://www.hotetu.net/haisen/Tokai/081229shizuokatetudousyunensen.html>

⁶⁹⁾ http://cgi2.nhk.or.jp/shogengarchives/shogen/movie.cgi?das_id=D0001150019_00000

る。また現地に在留した日本人捕虜阿彦哲郎氏は1954年抑留を解かれたがその後も在住している⁷⁰⁾。この人については、比留間氏も知己という。

表－2 本国送還機関を通じてソ連から送還された日本の軍事捕虜と民間人の人数に関する調査資料（1952年7月1日現在）

時 期	軍事捕虜	民間人	合 計
1946/9/16-1947/12/16	243,060	380,307	623,367
1947/12/16-1949/3/10	175,117	112,926	288,043
1949/3/10-1950/3/10	90,661	6,442	97,103
1950/3/10-1951/3/10	1,571		1,571
1951/3/10-1952/2/10	8		8
合 計	510,417	499,675	1,010,092

出所：ロシア連邦国立古文書館、関係文書9526、目録4、文書24、282頁
 ヴィクトル・カルポフ『シベリア抑留／ソ連機密資料が語る全容スターリンの捕虜たち』284頁

等々をソ連の開発に使ってもよいと判断したこと、ソ連側が経済開発の使役に使った事実、日本側の一挙に大量の帰還が行われても受け入れる道が立たなかったとされることなどがあるという。当時、そもそもソ連側が日本に提示した抑留者の数字は、占領軍当局が日本に指示した数値よりも少なめであることにも見られるように、これ自体が駆け引き材料であったことがうかがわれる状況であった。さらにソ連側は送還の対象としない人物を以下の詳細な事項にまとめていた。①諜報機関関係者、②スパイ工作の教官、生徒、③反乱部隊員、④細菌戦部隊関係者、⑤ソ連に対する軍事攻撃の準備を摘発された将官、将校、⑥ノモンハン事件仕掛け人、⑦ファシスト団体とみなされた満州国「協和会」関係者、⑧収容所で敵対行動や民主的組織への敵対者と組織関係者、満州国及び大日本帝国政府関係者の7つの類型がそれである⁷¹⁾。これだけの類型をあげられると、特に関係者であった人々を中心に、帰還が現実には遅れる理由が思想上の問題として意識されたのは疑いがないであろう。これはまさに大井氏が認識したことにも見られるとおりでであろう。先にも見たように、これとソ連側の、労働力として活用しようとした抑留者たちを帰還期日の繰り延べに策したことが加わっていたわけである⁷²⁾。他にも中央部では1947年の送還を月3万人のペースを提案したが、サハリンや、島しょ部では現場での労働力問題で、この基本が守られなかったこともあるという⁷³⁾。

ここで旧ソ連側の公文書類に基づき抑留者と帰還の推移を捉えておこう。これによると、帰還が開始された1946年以來1952年までに1,010,092人にも及ぶ。うち軍事捕虜が510,417人であった(表－2)。こうした帰国事業が長引いた原因として種々の文献が指摘するのは、日本側の敗戦処理に際しての現地残留軍人

⁷⁰⁾ 羅翔カザフスタン⑤2011年9月28日フジテレビ放映「カザフスタンで生きる元日本軍兵士」、阿彦哲郎氏、<https://www.youtube.com/watch?v=sKAYBxzujbs>

⁷¹⁾ ヴィクトル・カルポフ『シベリア抑留／ソ連機密資料が語る全容スターリンの捕虜たち』293－294頁。

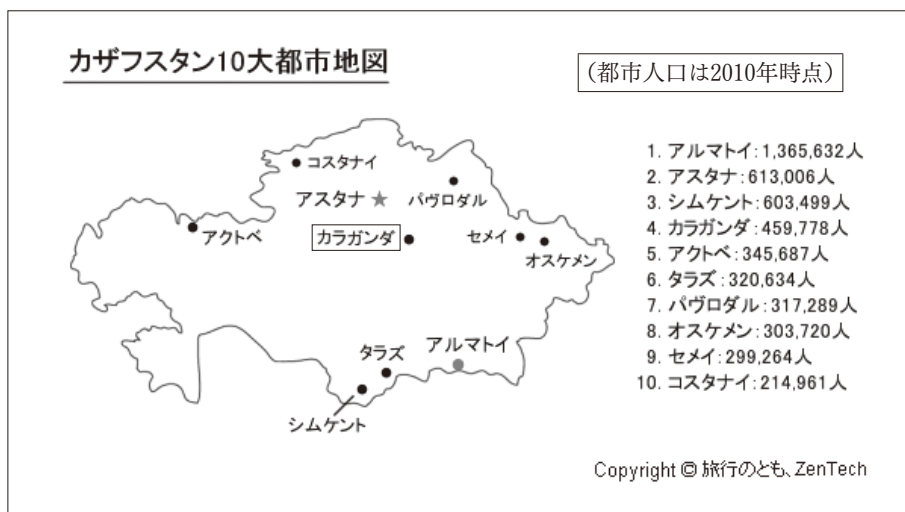
⁷²⁾ 同、297頁。

⁷³⁾ 同、300頁。

後記

以上、大井篤郎氏（421-0422 牧之原市静波）よりヒアリング2016年3月21日 午後1時半～5時、4月30日 午後1時半～4時と、4月1日のご本人からの電話取材、さらに4月30日の二度目のインタビュー、ご長男清司さんのメモ「大井篤郎の履歴」を加え、その前に夫人・てるさんがご本人から聞き取られた記録、6月17日、7月17日の電話取材を合わせておいた。ただし戦後の帰国当時までに限定したので、ご本人の戦後の記録、特に家族のその後の部分は割愛した。

可能な限り前後する証言を時期ごとに調整したが、それでもご本人の思いを活かしておいた。また写真を配したが、ヒアリング当日にご好意でお見せいただいたものである。この二度にわたるインタビューと幾度かの電話取材で、認識させられたのは、抑留生活で、真偽のほどは定かではないが、それでも信じる環境の下で、アクチブ若しくはその協力者になれば、帰国が早まる



とのうわさの飛び交う中で、そのような切り替えをすることもなく、過ごした抑留生活が長期にわたったという状況の中で、民主化グループの一員にもならず、生き抜いたという大井氏の意志力は極めて強靱であったといえるだろう。同氏の回想にもある通り、根っからの軍国主義者であっても、民主グループに身を寄せる人もいたが、ご本人はその道をとらなかったのである。もちろんそのような表面的へつらいが、必ずしも功を奏したわけでもないことも認識されていたのである。

筆者は大井氏の状況を教えられたことと、様々の回想記録、それにソ連側公式文書館から出た資料類を含めて、ここで改めて、次のようなまとめも可能におもえる。まず戦争捕虜に当たる元軍人兵士たちと共に民間人もソ連に連行されたこと事態は国際法違反であることは疑えない。と

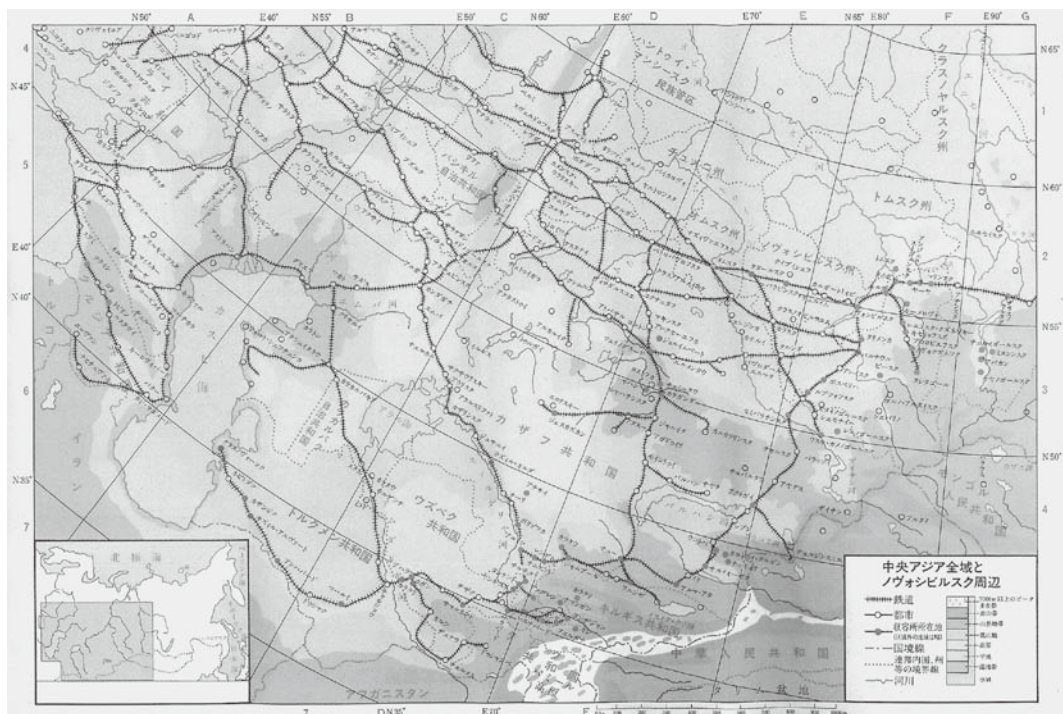
同時に回想者の少なくない人々が述べてきたように、戦後の日本政府の姿勢にも大きな疑問が生じる。というのは北方領土問題と捕虜の一刻も早期の救援という人命にかかわる問題との間で、政府自ら、領土問題の「解決」を先行させたために、多数の人命を奪われたという歴史的事実であろう。それに政府、関東軍が戦争末期に取った、捕虜のソ連での労役従事を肯定するかの姿勢、戦後の短期的な大量の帰国が日本の復興に障害となると認識していた観のある姿勢も問われるだろう。

加えて、筆者は、この作業を行う中で、次のような認識をもつことになった。それは捕虜となった下士官兵と、上級将校たちの問題へのとらえ方に相当の開きがあった。大井氏のように兵の位置にあった人々は、比較的冷静な目で状況を捉え、当時のソ連における民族差別のなさ、民衆の生活の劣悪さと捕虜収容所生活との比較なども行っていたことである。決して自らの生活の劣悪さだけが問題ではなく、戦後のソビエト民衆の貧困も理解し、共感さえしていた。「民主運動」に対しても、当初、旧軍将校らの下士官兵に対する暴圧に不満が生じ、抵抗があったこととともに、どちらかといえば下士官兵は、教育水準が低かったために、現地で軍の理解ある知識層から日本語の勉強の手ほどきさえ受けていたのである。大井氏も指摘しているように、将校らの中には変わり身早くソ連側の「民主運動」に表面的に賛同して行動する人がおり、これに対する反発や信頼の欠如が存在したことである。この変わり身の速さは帰国後、またソ連の暴政を非難するという変貌を遂げたことにもなったという。これに対して下士官兵のなかで、文字通りソ連側の社会主義思想の優位性を信じ、運動に身を投じた人々もいたのである。こうした人々は故郷に残してきた家族の境遇を知っているからこそ、その道を正当だと信じるのが出来たようである。高等教育を受けた人々は上位の幹部になったわけであるが、高杉一郎氏の回想記を読むと、彼は東京文理科大学英文学専攻を経て、従軍するが、シベリアでは肉体労働というよりも事務労働に従事する場合が多く、その中で、ソ連側の民主化への指導の意味をそれなりに評価する一方で、しかしスターリン主義の専制への疑問を明確に意識していたことも事実である⁷⁴⁾。こうしたレベルの高い認識は、評価されてよいだろう⁷⁵⁾。

なお以下に抑留者の送り込まれた地域と人数や気候などの参考資料を添付しておいた。

⁷⁴⁾ 高杉一郎『極光のかげに シベリア俘虜記』目黒書店、1950年。高杉氏には他に『スターリン体験』岩波書店、1990年、『シベリアに眠る日本人』岩波書店、1992年、『征きて還りし兵の記憶』岩波書店、1996年がある。

⁷⁵⁾ 総務省委託平和祈念展示資料館『シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦（抑留編）』全19巻に、3、85人の膨大な体験記録が寄せられている（第4巻「調査対象王かつ」による）。しかもこのシリーズは報告内容の分類（生活面、労働内容、民主運動、帰国後のアカレッテルなど）を行った付録をつけているのが極めて貴重であろう。



『捕虜体験記』V「中央アジア篇」の付図による。

【参考資料】

以下は、本稿にとって参考となる資料の一部を示す。

炭坑の街カラガンダ（総務省委託平和祈念展示資料館『シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦（抑留編）』第11巻） 京都府 八木敏雄

昭和十七年一月七日、現役兵として広島電信第二連隊に入隊する。

昭和十九年春、奉天（現瀋陽）の関東軍通信教育隊橋本隊に転属した。初年兵教育をやりながら中隊の事務室勤務をする。三ヵ月の速成教育を三回ほど務めた。

昭和二十年八月十五日朝、いつもと同じように中隊事務室にて事務をしていたとき、ラジオで「正午に重大ニュースを発表します」と報道された。正午になるのを待ってラジオを聞いていた。「日本国は全面降伏した」と発表があり、そのあと天皇陛下が泣いたような声で「終戦の詔書」を読まれた。事務室にいた全員が思いもよらぬ出来事に度胆を抜かれたように一瞬黙り込んでしまった。その月の末頃、ソ連兵が進駐して来て兵器を全部取り上げてしまった。それから九月末頃まで何もすることがなかった。

ある日「日本へ帰すから身のまわりのものを始末せよ」との命令が下った。その後奉天駅にて

列車に乗せられ、三、四日かかって黒河に着いた。「これからアムール河を渡ってシベリア鉄道でウラジオストックへ行き、日本へ帰す」と説明された。それから全員、メリケン粉の十キログラム入り袋を持たされ船着場まで運ばされた。空腹と過労で死ぬ思いであった。夜になって荷物を船へ積み込む作業をさせられた。様子のわからない暗闇で、甲板の上から船倉まで落ちて一人犠牲になったと聞いた。船積みが終わり、河岸の幕舎で一夜を明かす。翌日アムール河を渡りソ連領に入った。あとで判ったのだが、ここがブラゴエシチェンスクであった。

十月一日であったと思う、貨車一台に四十人余り乗せられ、出発した。一晩中貨車は走り続けて夜が明けて外を見ると、日本と反対の方向へ走っていた。まんまと騙されたことに気づいたが万事休すだ。もうこうなったらいつ帰れるか判らないと皆がガックリとなったものである。長い間入浴もせず、顔を洗うことも出来ず、虱と南京虫に悩まされていた。列車はどんどん西へ向かって走る。途中食事の準備で止まった。チタというところだ。出発して何日目だったか覚えていないが、全員下りて入浴するという。衣類は入浴している間に熱気消毒で虱を退治してくれた。久しぶりに気持ち良くなったが、また列車にすし詰めになされて走る。水や燃料の補給か、時間の調整か、再々止まってはまた走り出す。自分は栄養失調で食べ物を受け付けなくなり、半分死んだようなものだった。駅の名前は覚えていないがソ通人が丸い大きなパンを売りに来たので、隠して持っていた万年筆と交換して食べたらずっと胃袋が受け付けてくれ、命をつなぐことが出来た。それから何日か走ってノボシビルスク駅に着き、そこからシベリア鉄道を外れて列車は南へ南へと、二日間くらいして炭坑の街カラガンダに夕方着いた。十月二十日だったと覚えている。

さすが大陸の冬は早い。夜になると零下三十度くらいに下がっていたと思う。収容所の前で雪の上に五時間くらい座らされてもう駄目だと思った。監視兵の「ダワイ」に追い立てられてバラックに入る。板張りの二段ベッド一組で四人寝られるようにしてある。おがくずの入った薄い敷布団と、掛け布団は毛布二枚であった。

翌日から全員作業に出る。収容所へ引く水道の穴掘り作業だった。自分は身体が弱っていたので休ませてくれた。一週間ぐらいいして炭坑の作業に出ることになって、自分も出られるようになっていた。

それから毎日石炭掘りをドイツ人と一緒にやった。一昼夜三交代で、一組は午前八時から午後四時まで、二組は午後四時から十二時まで、三組は午前零時から八時まで、組替えは一週間毎にやった。自分の仕事はトロッコを通す坑道掘りで、鳥居を二本組み上げて、掘った石炭とボタはトロッコに積んで片付けねばならなかった。八時間働き詰めでも予定の作業が完成しない時が度々あって、次の組のカマソジールがひどく怒った。毎日炭坑まで歩いて一時間半、雪の酷く降るときには二時間以上かかり、空腹と疲労で死ぬ思いで歩いた。収容所にいる十二時間足らずの間に三回の食事を摂らねばならないから寝る時間がなく疲れが取れず、その上食事の少ないこと、一

食パン一切れのとときと飯合二杯のスープのとときがあり、食べたそのときから空腹の連続であった。お互いに話し合うことは食べ物の話ばかりである。それにもかかわらず作業はノルマ制で、八時間ではとても出来ないノルマで、一〇〇パーセント出来ないときはその分食事が減らされ余計能率が上がらず、身体は痩せて皆見る影もない有様であった。

六ヶ月に一回くらいソ連の女医が来て身体検査が行われた。お尻の肉をつまんで一級・二級・三級、ロシア語ではアジーン、ドヴァー、トリーと呼び、一級は炭坑、二級は農場や地上勤務、三級は入院療養と分けられた。自分は見る影もなく痩せて骨と皮ばかりとなり、七十日間くらい病院内の掃除ばかりやらされたこともあった。また、あるときは農場の作業に出て、小麦倉庫の作業や、人参の列車積み込みとトラックから下ろす作業には人参を生でかじりながら作業をしたこともあった。作業していても言葉がわからず、ロシア人は腹を立て殴るやらで、地獄のどん底の毎日であった。食事の量が少ないので仕事が出来ないと訴えたあるとき、そんなはずがないということから、上の方ではそこそこ出していたものを共産党の幹部が横流しをして私腹を肥やしていたことが我々の上申で分かって罰せられたと聞いた。

昭和二十二年の冬になって食事也大分良くなって空腹を満たすようになり、給金も少しくれるようになった。ある晩、仕事に疲れて寝ようと思っていたら材木の貨車下ろしに出よとのことで、一台分を下ろし終わったら帰すと言っていたが、もう一台分下ろせと言うので、それでは話が違おうと抗議すると「お前等は捕虜だから死ぬまで働け」と言われ、情けないやら口惜しいやら、煮えくり返るほど腹が立ったが仕方なく作業をすませた。そのときは材木はこちこちに凍りついていた。零下三十度くらいは下がっていたと思う。今も共産党とロシア人に対する憎しみは忘れることが出来ない。夜空の月を見て、歌の文句じゃないけれど「あれが鏡であったなら日本の故郷が映るのになあ」と涙したことが度々あった。何としても死んではならないと自分で励ました。

ソ連生活も三年目に入って身体はポッポツ元気を取り戻してきたが、幸いと言うか不幸と言うか、三日ほど作業をしたら熱が出て作業を休むことが出来た。それがだんだん多くなってきた。ロシアでは、いくら具合の悪いところがあっても熱が出なかつたら偽病（ヒートリーバリノイ）ということで仕事に行きなさいと言う。

昭和二十三年七月末頃「これから名前を呼んだ者は日本へ帰すから準備せよ」と言われ、自分もその一員に加えてくれた。これも先に述べた熱のお蔭である。しかし、これまで度々騙され続けていたので直ぐには喜ばなかった。カラガンダ炭坑を後にして列車は何日も何日も走った。東へ東へと走っているので何となく日本が近づくようだ。やがてナホトカに到着した。汽車の中でも民主教育は盛んであったが、ソ連最後のこの地での三日間は、朝から晩まで「共産主義は世界の常識である。資本主義はやがて影を失い、世界の国々が赤旗の下スクラムを組むところに世界の平和と個々人の幸福が得られるのである」ということである。

港に信洋丸という引揚船が入って来た。一人一人名前を呼ばれて船に乗っていく。皆何も言わずに黙々と船室に入る。頭の中では、帰れるのだ、帰れるのだと繰り返し叫んでいる。船はいつしか出航していた。三日間波穏やかな日本海を航行していた。「日本が見えるぞ！」皆甲板へ上がって近づく島影を眺めて涙を浮かべていた。

九月三日、六年九ヵ月ぶりに内地の土を踏んだ。たとえようのない嬉しさに胸がドキドキする。大勢の出迎えを受けて船を下り、宿舎へ入った。数日の内にいよいよ懐かしの故郷、八木町へ帰れるのだ。

短歌『抑 留』

終戦の日が近づくと涙出ず

異国で逝きし戦友をしのびて

毎日をノルマノルマでたゞかれて

空腹のため倒れし戦友よ

月の夜にあれが鏡であるならば

故郷うつせと思う淋しさ

「シベリア抑留記」カラガンダ ウーゴリ会 会報 H13.5— 音楽班でのこと —

(神奈川) 森口一彦

抑留生活も三年目になって、私はカラガンダ地区第九収容所の音楽班に入り、仕事も炭坑から地上勤務に変わった。その年の夏、一部の日本人捕虜の帰国が決まり、地区の楽団が合同で帰還者を音楽の演奏で見送ろうということになった。

その目的の為に楽団が集めた場所は、日本人の収容所の一つだがドイツ人捕虜も沢山いた。これらのドイツ人捕虜も本国への帰国を前にして集結していたのかも知れぬ。

日本人収容所の楽団員の数は一収容所に五人か十人位と思われるが、この時集まった人数は楽器を演奏する者の数で、七十名位であったと思われる。作曲家上原げんと氏の弟さんの上原さんがおられたことを思い出す。この弟さんも恐らくプロの音楽家と思われるが、アコーディオンを上手に弾きこなしているのを知っている。

全員が集まったところで日本人の民主委員の挨拶がある。

「日本人の帰還の日まで約二週間である」

「この日までに曲を決め、楽譜を作り演奏の練習をして欲しい」

「これらの作業を一日八時間かけてバッチリ行って欲しい」

とのこと。

実はこの時、自分がプロの音楽家になったような気がした。こんなことは後にも先にも初めてで、最期の経験でした。

私は、ドイツの軍楽隊長だったタイケが作曲した行進曲の名曲「旧友」を選びました。

実はこの曲の中間に主旋律にのせてサクソホーンのオブリガード（副旋律）が入るところがあり、それを是非とも自分が演奏したいという気持ちがあったからです。私の楽器は、アルトサクソホンとクラリネットでした。

私は苦勞しながら指揮者用の総譜と各楽器のパート譜面を一週間かけて完成しました。そしていよいよ合奏練習が始まりました。音楽というものは演奏する者の人数が多くなると、すごく迫力が増してくるものです。

ある日、私の友人が私に言いました。

「森口よ、この収容所にいるドイツ人が旧友の曲を聴いて、えらく騒いでいるぜ」。

どうということかと聞くと、「旧友」の曲は日本の曲でいうと「軍艦マーチ」のようなもので、軍国主義の音楽ということでドイツの楽団はソ連邦内では演奏を遠慮している。それを日本人の楽団が演奏してくれるので、久しぶりに聞いたせいもあり嬉しくてしかたないということらしいのです。

さて、この曲についてソ連側の苦情もなく日本人捕虜が帰還する日が来て、駅頭での送別の演奏も無事終わりました。

実はこの曲の後日談ですが、翌年の昭和二十四年にカラガンダ地区の抑留者は戦犯の罪に問われている方を除き全員帰国しました。帰国後二十年以上も経って、あるシベリア時代の戦友会で、昭和二十三年に帰還した青森出身の人の話を聞くことができました。

「列車が駅を離れるに従い『旧友』の曲がだんだん遠くになって、そして消えていったが、私の心の中のメロディーはいつまでも消えずに残っていた……」

よくぞ覚えていて下さいました。有り難う、有り難う、有り難う

※： 上原げんと氏の弟さんについて：

この文を会報に掲載後、上原げんと氏の弟さんは上原賢六氏と判明。

上原賢六氏は、シベリア抑留後、昭和23年上京し、プロの作曲家として昭和28年テイチクレコード専属となる。

石原裕次郎とのコンビでは「俺は待ってるぜ」・「錆びたナイフ」等、40曲近くを作曲

カラガンダ（カザフ語：Қарағанды，ロシア語：Караганда）は、カザフスタン共和国のカラガンダ州の州都である。2006年現在、カザフスタンでは、アルマトイ、アスタナ、シムケントに次ぎ人口では4番目の都市。



プロジェクト別日本人捕虜投入計画

(極秘指令より志村英盛作成 <http://www7a.biglobe.ne.jp/~mhvpip/CombineDorei1.html>)

	地域	区分	プロジェクト	人数(人)
1	バム鉄道	鉄道	バイカル・アムール鉄道建設	150,000
2	バム鉄道	鉄道	バイカル・シベリア鉄道建設	5,000
3	チタ州	鉄道	ザバイカル鉄道	3,000
4	沿海地方	鉄道	沿海鉄道	5,000
5	カザフ共和国	鉄道	ジャンプロフ州カラガンダ鉄道	9,000
			小計	172,000
6	沿海地方	炭鉱	スーチャン，アルコム両炭鉱	25,000
7	ハバロフスク地方	炭鉱	ライチハ・キブジンスキー炭鉱	20,000
8	イルクーツク州	炭鉱	チェレンホフ炭鉱	15,000
9	チタ州	炭鉱	ブカチャンチンスク炭鉱，チェルノフスク炭鉱	10,000
10	カザフ共和国	炭鉱	カラガンダ炭鉱	10,000
11	ウズベク共和国	炭鉱	アングレン炭鉱	3,500
12	クラスノヤルスク地方	炭鉱	ハカス炭鉱	3,000
			小計	86,500
13	ウズベク共和国	工場	ベゴバド金属工場タシケント諸工場	15,000
14	イルクーツク州	工場	水素処理工場等建設	10,000
15	アルタイ地方	工場	ルプツォフカ・トラクター工場バルナウル工場	6,000
16	クラスノヤルスク地方	工場	工場建設拡張	5,000
17	ハバロフスク地方	工場	サハリン石油工場&各石油蒸留施設	5,000

18	アルタイ地方	工場	ビイスク・ボイラー工場	4,000
19	クラスノヤルスク地方	工場	エニセイ金属工場	3,000
20	カザフ共和国	工場	南カザフ州アチサイ多金属工場	3,000
21	イルクーツク州	工場	工場建設	2,000
22	ブリヤート・モンゴル	工場	ウランウデ機関車工場	2,000
23	クラスノヤルスク地方	工場	第四工場	2,000
24	ウズベク共和国	工場	カリーニン石油工場	1,500
25	アルタイ地方	工場	バルナウル軍需工場	1,000
			小計	59,500
26	沿海地方	伐採	森林伐採現場	18,000
27	ハバロフスク地方	伐採	森林伐採現場	13,000
28	ブリヤート・モンゴル	伐採	森林伐採現場	10,000
29	イルクーツク州	伐採	森林伐採現場	7,000
30	クラスノヤルスク地方	伐採	森林伐採現場	7,000
31	チタ州	伐採	森林伐採現場	4,000
			小計	59,000
32	カザフ共和国	鉱山	ウスチカメノゴルクス・ズイリャノフスク鉛鉱山	15,000
33	チタ州	鉱山	モリブデン・タングステン・錫関連企業	13,000
34	カザフ共和国	鉱山	カラカンド冶金機械製作タングスタン・コンビナート	10,000
35	沿海地方	鉱山	トホテ・アリンスキー鉛コンビナート・シナンチャ錫工場	5,000
36	ブリヤート・モンゴル	鉱山	モリブデン・タングステン・コンビナート	4,000
37	ハバロフスク地方	鉱山	ヒンガン錫鉱山	3,000
38	アルタイ地方	鉱山	ゾラツェシュク非鉄金属鉱山	3,000
39	カザフ共和国	鉱山	ジェズカズガン非鉄金属鉱山	3,000
			小計	56,000
40	イルクーツク州	兵舎	兵舎建設現場	11,000
41	沿海地方	兵舎	兵舎建設現場	10,000
42	チタ州	兵舎	兵舎建設現場	10,000
43	ハバロフスク地方	兵舎	兵舎建設現場	5,000
			小計	36,000
44	ハバロフスク地方	建設	ニコラエフスク港アムール・コムソモリスク等工場建設	15,000
45	沿海地方	建設	ナホトカ、ウラジオストク港建設現場	12,000
46	ハバロフスク地方	建設	アムール自動道路	2,000
47	ハバロフスク地方	建設	海運及び河川運輸	2,000
			小計	31,000
		合計		500,000

日本人捕虜のシベリア奴隷労働被害(シベリア抑留)2013年2月 Minade Mamoru Nowar (<http://www7a.biglobe.ne.jp/~mhvpip/Hantai.html>)

カラガンダの気候

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%83%A9%E3%82%AC%E3%83%B3%E3%83%80#.E6.B0.97.E5.80.99>

月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
最高気温 ℃	6.2	6.0	22.1	30.6	35.6	39.1	39.6	40.2	37.4)	27.6	18.9	11.5	40.2
平均最高 ℃	-8.7	-7.7	-1.4	12.0	20.1	25.6	26.8	25.4	19.2	10.5	-0.2	-6.8	9.57
日平均 ℃	-12.9	-12.7	-6.2	5.6	13.3	18.9	20.4	18.6	12.2	4.4)	-4.8	-11.0	3.82
平均最低 ℃	-17.1	-17.2	-10.4	0.1	6.9	12.3	14.3	12.3	6.1	-0.3	-8.6	-15.1	-1.39
降水量 mm	24	22	22	26	41	36	47	28	21	28	31	26	352

歴史 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%82%B6%E3%83%95%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%B3>

1940年代は、人口の70%がドイツ系住民であった。ヒトラーのポーランド侵攻に対するスターリンの命でヴォルガ・ドイツ人がシベリアやカザフスタンに追放されたものである。彼らは第二次世界大戦終結後もグラグに抑留された。1989年から1999年にかけて人口は14%も減少、10万人を越えるドイツ系住民がドイツに帰還していった。カラガンダという市名は、この辺りに群生している「オオムレスズメ」の名前（*Caragana arborescens*）に由来する。カラガンダは、強制収容所の人々を酷使して石炭の採掘を行うために生まれた町である。現在でも石炭産業は市の重要な位置を占めている。1990年初頭には独立したカザフスタン共和国の首都の候補にもなったが、アスタナに選ばれた。もともとのカラガンダの町は石炭を掘りつくしたため破棄され、現在の市街はそこから南へ10kmほど移転したものである。かつて、シベリアに抑留された日本人捕虜が多く連行されており、カラガンダ郊外には収容所博物館がある。

民族（以下、同）

カザフ人が多数派となったアスタナと違い、今でもロシア人が最も多く、全体の半数を占める。ドイツ系住民は現在でも多い。以下は、民族別の人口割合である。他に、ポーランド人（2,535人）やチェチェン人（2,127人）も比較的多く住んでいる。元日本人抑留者とその子孫も在住している。

- ロシア人 45.57%
- カザフ人 36.25%
- ウクライナ人 4.80%
- ベラルーシ人 1.16%
- ドイツ人 3.31%
- タタール人 3.05%
- 高麗人 1.57%

第1部 ソ連侵攻〈1〉永住帰国わずか2年…抑留の果て祖国失う

<http://www.yomiuri.co.jp/error.html?rUri=%2Fyol%2Fhokkaido%2Ffeature%2FCO012871%2F20150107-OYTAT50042.html> 2015年01月01日 読売新聞



記者が差し入れた鏡餅を手に、笑顔を見せる阿彦さん（昨年12月18日、カザフスタン・カラガンダの阿彦さん宅で）

残留邦人・阿彦さん なじめず再びカザフに

先の大戦が終わり、2015年で70年。終戦間際にソ連が侵攻した樺太（現サハリン）や千島列島では、多くの犠牲や家族の別離を生んだ。今も北方領土が返るメドは立たず、元島民の焦りは募る。終戦の後も続いた北の戦い。戦後も長く、ソ連で暮らさざるを得なかった人や、戦場に居合わせた人の思いをたどる。



手みやげの小さな鏡餅を記者が渡すと、笑みを浮かべて懐かしそうに見入った。

昨年12月18日、中央アジア・カザフスタン中部のカラガンダ中心部から車で約20分。荒野に突如現れた小さな集落にある5階建ての団地

に、ソ連時代にこの地で強制抑留された阿彦哲郎さん（84）は暮らしている。真冬は氷点下40度近くになるが、強風に吹き飛ばされ、積雪は少ない。阿彦さんは2012年に永住帰国を果たしたはずの札幌市から、半年前に戻ってきた。

「ここに日本人はいないから、日本語を忘れてしまっ
て」。言葉を絞り出しながら続けた。「日本にいる知り合
いに、『俺は元気だ』と伝えてほしい」

■突然の逮捕

日本統治時代の樺太で、阿彦さんは山形出身の漁師の三男として生まれた。1945年8月、ラジオで日本の敗戦を知ると悔し涙をこぼしたという。その後、ソ連軍の侵

攻を受け、母や弟の藤井祐三さん（80）（石狩市）らは先に北海道に疎開した。

見送りの際、「船に乗って」と大きく手招きする母が見えた。だが当時、15歳以上の男性は残ることになっており、阿彦さんは責任感から乗船しなかった。祐三さんは「こっそり船に乗る人は大勢いた。あの時に乗ってさえすれば……」と残念そうに言う。



17歳だった48年6月、父と暮らす自宅にソ連兵3人が突然訪れ、逮捕された。阿彦さんは「テロリストと疑われたようだが、全く身に覚えがない」という。このまま裁判にかけられ、10年の刑を受けた。

【カザフスタン】ソビエト連邦を構成する「カザフ共和国」だったが、1991年12月の連邦崩壊で独立した。面積は世界9位の約272万平方キロ・メートル、人口は約1,700万人（2013年）。四方が陸地で海はない。97年に遷都した北部のアスタナは、建築家の黒川紀章氏（故人）が基本設計を担当した。石炭や天然ガスなどの資源が豊富。言葉も分からず、樺太からソ連本土のカザフ共和国（現カザフスタン）へ、鉱山などでの強制労働で、頑丈だった体は骨と皮だけになった。独裁者スターリンが死去した翌年の54年、カラガンダで釈放された。

お金も住まいもない。炭坑労働者向けの食堂に忍び込み、集めた残飯を服の裾をめぐって抱え込んで、木の下や路上で少しずつ食べた。釈放後も3か月ごとに警察に出頭を義務づけられた身。誰も雇ってくれない。阿彦さんは『『食べ物、食べたいな』とばかり考えていた』と当時を振り返る。困窮ぶりを見かね、現地の炭坑労働者が手をさしのべてくれた。セメント工場で雇われ、電気溶接の技術も教えてもらった。

■体調崩す 戦後、ソ連軍に抑留された元日本兵はこの頃、続々と帰国していたが、阿彦さんはなぜか、1人取り残された。「帰国したい」と訴える手紙を何度も日本大使館などに出したが届かない。日ソ間に国交はなく、大使館は存在していなかった。

帰国を諦め、職場で知り合ったドイツ人女性と56年に結婚した。皮肉にも同年、犯罪者の帰還などをうたった日ソ共同宣言が出たが、詳しい情報は届かなかった。「本当は帰りたかったが、結婚して少し幸せと思ひ、その後『帰りたい』とは言わなかった」。望郷の念は胸の奥にしまい込んだ。

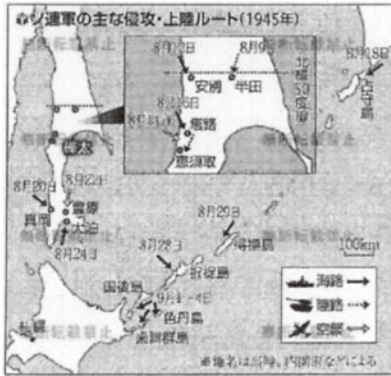


国際電話で阿彦さんと話し、元気そうな様子を喜ぶ佐野さん（昨年12月12日 埼玉県朝霞市で）＝稲垣信撮影

逮捕から46年後の94年、初めて帰国がかない、弟の祐三さんらと再会できたが、両親は既に他界していた。一時帰国を重ねる中、充実した日本の医療などにひかれて12年、現在の妻エレナさん（78）と永住するつもりで札幌市に住んだ。

焦がれたはずの祖国で、体調を崩す。住み慣れたカザフスタンに比べ、雨の多い気候がこたえた。日本の生活になじめないストレスも重なり、わずか2年余りでカザフスタンに戻ることに。帰国に尽力した支援者の1人は「日本語を話せない奥さんを思いやったのでは」と推し量る。

戻った直後、阿彦さんの胃には穴が開いていたという。回復はしたが、自宅での取材に「楽しみは何もないよ。ただ生きているだけで」と寂しそうに笑った。「日本にもう一度帰りたくありま



せんか」と問うと、言葉に詰まった。

「(支援者らに) 合わせる顔がない。日本に帰るのはダメです」。断ちがたい祖国への思いを振り払うように、静かに首を振った。

■日本人の埋葬碑

抑留者の埋葬地には、日本のほかドイツや韓国など各国の慰霊碑が並ぶ(昨年〔2014〕12月19日、カラガンダで)

昨年12月19日、阿彦さんは記者とともに、カラガンダ郊外の草原にある、日本人墓地の埋葬碑を訪ねた。

ドイツや韓国など各国の慰霊碑も並ぶ。周囲に建物はなく、突き刺すような寒風が吹き付ける。近くには、かつて阿彦さんが抑留された収容所があった。

右手でつえをつきながら歩を進め、「新聞記事にするなら、ぜひ書いて下さい」とおもむろにロシア語を交えて語り出した。「戦争がどれぐらい悪いか。戦争があれば、必ず俺のような状態がたくさんあるんですよ。平和を愛するよう、日本の若い人に伝えて下さい」(カラガンダ、稲垣信 写真も)

◇ 日本語・生活習慣の壁 阿彦哲郎さんが初めて一時帰国した1994年当時、在カザフスタン日本大使館に防衛庁(当時)から出向していた佐野伸寿さん(49)は、離任後も家族ぐるみで付き合いを続けた。現在の所属は埼玉県の自衛隊体育学校だが、永住帰国したはずの阿彦さんがカザフスタンに戻ることを知ると、「もう会えないかもしれない」と思い、出発直前の昨年6月中旬、幼い息子を連れて札幌市東区の阿彦さん宅に駆けつけた。

日本酒を酌み交わしながら、「メロンはカザフスタンの方がおいしいよ」「また日本に帰っておいで」などと励ましたが、阿彦さんは寂しそうな様子で、「本当は日本に残りたいのでは」と胸の内を思い

太平洋戦争とその後の動き

1941年4月13日	日ソ中立条約に調印	
12月8日	択捉島・単冠河から出発した日本海軍がハワイ・真珠湾を攻撃=写真A=	
42年6月	ミッドウェー海戦。日本海軍が壊滅的打撃を受ける	
45年2月	米、英、ソ連首脳がヤルタで会談。ソ連の対日参戦と南樺太・千島列島の領有を密約	
3月10日	東京大空襲	
6月23日	沖縄戦終結	
7月14~15日	北海道空襲。軍需、鉱山、積舎などで大きな被害=写真B=	
7月26日	米英中が日本に①軍国主義の除去(②残土撤小や武装解除 ③戦犯の処刑)などを求めるポツダム宣言発表	
8月6日	広島に原爆投下	
8月9日	ソ連、中立条約を破棄し対日参戦。戦後、軍民約60万人がシベリアに強制抑留され約6万人が死亡	
同日	長崎に原爆投下	
8月15日	日本がポツダム宣言の受諾を公表し、第2次世界大戦が終戦	
8月28日	ソ連軍、択捉島に上陸	
9月2日	米艦隊ミズーリ号上で、露光英外相らが降伏文書に調印	
9月5日	ソ連軍、北方4島の占領を完了	
51年9月8日	サンフランシスコ講和条約調印。日本は南樺太・千島列島などの領有を放棄=写真C=	
56年10月19日	日ソ共同宣言。国交回復、抑留者の帰還などとともに「平和条約の締結後、密約、色丹の2島返還」で合意	
12月18日	日本が国連加盟	
72年5月15日	沖縄が本土復帰	
81年1月6日	北方4島を日本領と認めた日露通好条約(1855年)が結ばれた2月7日を「北方領土の日」に制定	
91年12月	ソ連が崩壊	
93年10月13日	細川融輝首相とロシア・エリツィン大統領、北方4島を帰属に関する問題と立場付ける「東京宣言」に署名=写真D=	
94年4月7日	カザフスタン・ナザルバエフ大統領が来日。細川首相に日本人抑留者の埋葬書名簿を手渡す	
2010年11月1日	ロシア・メドベージェフ大統領が国後島に上陸	
14年11月9日	日露首脳会談。プーチン大統領が2015年の「適切な時期」の来日を目指す方針で一致	

やった。佐野さんが大使館に赴任した94年、現地にはまだ帰国を果たせていない残留邦人が複数いた。「見過ごせない問題だ」と思い、休日に約400キロ離れた場所へ日帰りで邦人を捜しに行ったこともある。当時、旧ソ連国籍を持っている残留邦人が日本の入国ビザを取るのとは簡単ではなく、日本大使館に詳細な滞在計画や身元保証人を届け出る必要があった。阿彦さんも、ソ連時代に生活のため同国籍を取り、日本語も忘れかけていた。初めて一時帰国する前には佐野さんが必要事項を一から聞き出し、書類の作成を手伝った。残留邦人の帰国を支援する日本の団体とも連絡を取り合い、航空券の手配など帰国の段取りをつけた。

永住帰国する場合は、日本語や生活習慣の違いといった壁もある。祖国への思いと、日本行きをためらう現地の家族との間で板挟みになる残留邦人を見てきた佐野さんは「単に永住を勧めればよい、とは思えなかった」と語る。

阿彦さんがソ連の過酷な環境下で生き抜いたことについて、佐野さんは「『いつか祖国に帰る』という思いが心の支えになっていたのではないかと推測する。それだけに、再びカザフスタンに戻らざるを得なかった姿を見て、「阿彦さんにとっての戦後はまだ終わっていない」と感じている。

◇ **カザフで労働 1,500人が死亡** 在カザフスタン日本大使館などによると、1945年10月以降、約5万8,900人の日本人が当時のソ連・カザフ共和国に抑留された。厳寒の中、劣悪な環境での重労働で約1,500人が死亡したとされる。

カザフスタン最大の都市・アルマトイには「カザフスタン科学アカデミー」など、日本人抑留者が建設に関わったとされる建物が今も残る。郊外には日本人抑留者の墓地があり、現地の日本人会が毎年慰霊に訪れ、線香をあげているという。大手商社の駐在員で、日本人会会長の山口寛士やまぐちかんさん（51）は「日本から遠く離れたこの地で、日本人が抑留された理不尽な事実を絶対に忘れてはいけない」と訴える。阿彦さんが住むカラガンダは炭鉱の街として知られている。カザフでは最多の約3万4,000人が抑留され、約700人が死亡したとみられる。

◇ **降伏後侵攻止まらず** 1945年2月、米、英、ソ連3国の首脳はクリミア半島・ヤルタでの会談で、ソ連の対日参戦に合意した。ソ連の独裁者スターリンは、見返りに南樺太と千島列島の領有を認めるよう要求。米英両国は承諾し、3国で密約を結んだ。

ソ連は同年8月9日、日ソ中立条約を一方的に破棄して旧満州（現中国東北部）や南樺太（現サハリン）への攻撃を始めた。日本では同15日正午、終戦の詔書がラジオ放送された。その後もソ連軍は千島列島などに戦線を拡大。日本が降伏文書に署名した9月2日以降も軍を進め、同5日までに北方4島の占領を終えた。この間、樺太からの引き揚げ船が撃沈されるなど樺太関係で約4,000人の民間人が死亡した。

スターリンは日本の降伏後、米国に「北海道の北半分（釧路と留萌を結ぶ線以北）」の占領を要

求したが拒否され、北海道上陸は断念した。一方、軍に極秘指令を出して日本の軍人、民間人ら計約60万人をシベリアなどに抑留。約1割が死亡したとされるが、もっと多いとの指摘もある。また、約1万7,000人が住んでいた北方4島では約2年間、ソ連人との混住生活が続いた後、島民は本土に強制送還された。56年の日ソ共同宣言で両国の国交は回復したが、北方4島の帰属は確定せず、91年のソ連崩壊後もロシアが不法占拠を続けている。2015年01月01日 Copyright © The Yomiuri Shimbun

ほかに、阿彦氏に関して、NHK戦争証言アーカイブズ「15歳で逮捕後ソ連に抑留」で知ることができる (cgi2.nhk.or.jp/shogenarchives/movie.cgi?des_id=D0001130223_00000)。